いつも・いつでも・どこまでも〜〜っっ！

ウドの大木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつも・いつでも・どこまでも～～っっ！

【Ｎコード】
Ｎ５６７７Ｂ

【作者名】
ウドの大木

【あらすじ】
ここに現れたのは馬鹿である。馬鹿故に脳無しであり、脳無し故に暴飲暴食である。つまるところ彼女は精霊（自称）ノイン。かくその精霊（悪霊）に捕まった典時少年の苦悩と金銭の物語である

一話！――脳無し精霊（前書き）

チャラッチャチャ～

おはようございます。ＮＮＮ（ナイス・ノイン・ニュースの略）の時間です。アナウンサーのノインちゃんです♪
この番組は皆さんの疑問から不思議解決まで様々なモノを取材して皆様に御届けします。
それでは皆さんの最後までお付き合い下さい
それでは一旦ＣＭで～す

一話！――脳無し精霊

ＡＭ６：２０、起床時間

チュンチョンチュンチュンチュンチュンチュンチュンチュン

「・・・・・うるさっ」
やたら騒がしい雀の大群の大自然の目覚まし。
目が覚めた俺を出迎えたのはベランダ一帯を占領した大自然の目覚まし２００匹と、薄緑のショートヘアーに青い澄んだ瞳、ほっそりした顔付きで見た目は１５かそこら。俺の学校のジャージ上下を着て目覚ましの群れと一緒にチュンチュンぼざいてる我家の迷惑防止条令を無視した暴飲暴食脳無し馬鹿たれ精霊

「あ～～！やっと典時が起きた～」
その名はノインと言う

先に言っておくと俺は作間典時。まあ何処にでもいる様な普通の学生だ。今年から高校に通っていて一人暮らしをしている。たまたま受かった高校が遠いからこっちのマンションに住んでいる。
そしてベランダで雀の合唱に参加してるのが居候のノイン。あいつが言うには精霊らしい。まあ食って寝るが生き甲斐なんだろうな。
詳しい経緯は聞いてないが自分の国から分けありで来てるらしい。
迷惑だ
ベットを降りゆっくりした足取りでベランダに近づき

ガチンっ
「はぁいいいい？また典時が鍵かけた～！でも２０回以上やられてる私はもう怖くないもん！」
「ほう、怖くないか。ならこれならどうだ？」
ベランダと部屋を仕切る窓の前に置かれた白くてふっくら炊いたご飯。　そしてちょっとピリから明太子
炊きたてご飯の湯気は窓を曇らせる
「ゴメン典時・・・・・許して・・・・お願いだから・・・・・」
フラフラと崩れ窓に手をつけてまるで神に懺悔するように頭を下げる
「暫く頭を冷やせ」
そう言ってご飯の隣に熱々味噌汁と漬物を添える
「許して・・・・・お願いだから・・・・・・もう雀の合唱しないから・・・・生殺ししないで・・・・・」
カタカタ震えるノインはほっといてさっさと着替える。周りの雀達は心配そうにチュンチュン泣いている
するとノインは何を狂ったのか血走る目で呟く
「・・・・・２０匹位で少しは空腹忘れれるかな」
バサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサバサ
「ああぁ！待って！冗談だから帰ってきて！独りにしないでぇぇぇぇぇぇぇ！！」
ベランダから身をのりだし去っていく雀を懸命に引き留めようとするノインだが鳥業界の裏切りの罪は重いらしく、一匹も振り返る事なく飛び去った
「ひっく、ひっく、ひっく、グスッ・・・・・」
ベランダの隅ですすり泣くノインを横目にいつも通りの朝食。今日はちょと出掛ける予定があるんだよな
「ひっく、ひっく、ひっく、グスッ・・・・・・・・・・ひもじいよ～」
茶碗を片付けた後窓に近付きしゃがむ
「ノイン、食べたいかご飯？」

物凄い速度で何度も頷くノイン
「なら明日から雀の合唱は止めろ。序でに烏も鳩もインコも駄目だ。つうか鳥類禁止。ＯＫ？」
「ザッツライト！」
「交渉決裂と・・・」
「嘘嘘嘘ウ～ソ～！ＯＫＯＫベリ～オッケーです！」
まあ多少は反省しただろうと思い鍵を開けてやる。素早く部屋に転がりこんだノインは愛しの人生の友、箸に頬擦りして声高らかに叫んだ
「ビバ！食卓！！」

結局６杯もお代わりしたノインは満足そうにベランダで涼んでいるその隙に俺はこっそり部屋を抜け一階の駐車場にあるバイクに跨る。ヘルメットを被りエンジンをかけたその時、天高くから何かが聞こえる
「てぇぇ～～ん～～～～～じぃぃぃぃぃ～～！！！！！」
一応俺の部屋は５階なんだが何故ノインはそこから飛び下りたんだ？自殺志願？
ノインは体を丸くしてクルクルと華麗に回転し、バッと両手両足を伸ばしてまるで側転の様に更に回転して地面にスタッと着地

したかったんだろう。だが運が悪いのかこの程度で済んで運が良いのか、ノインは微妙に足首を捻りその場にポテッと転んだ
涙目で体を起こしたノインは映画のワンシーンの様に手を伸ばし、無言の救助を訴えている
「・・・・・・・・・・」
訴えている
「・・・・・・・・」
訴えている
「・・・・・・・・」
訴えている
「あ、ポケットにクッキーが」
「もらったあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
バイク発進
「置いてかないで典時～～」
腰にしっかりしがみ付くノインは鯉のぼりみたいに宙に浮いているまあ気にしないのもいいんだが流石に世間一般の方には良い印象を与えないので仕方なくUターン。ワザワザ部屋に連れていき（注意、ただノインが離れないだけ）部屋に放り投げる
「ったくさっさと着替えろ。今から利下（りか）ん所行くから少しは――――」
「利下・・・・キクサゲね！ついに敵陣に乗り込む日が来たのね！」
意気込んで部屋に向かい5分後には何故か旧日本軍の軍服で現れたノイン。肩には刺繍で【トイレにセボ〇】と恥じを捨てた覚悟が刻まれていた
「よし、お前は留守番確定だ」
「冗談だから置いてかないでぇぇぇぇ！」

結局普通の私服に着替えたノインを乗せてバイクを走らせる
都心から離れ舗装された山道を登ると見えてきた御屋敷
本名高見沢利下（たかみざわりか）
両親共に外国で働いているのであの屋敷に一人で住んでいる。有能な執事やメイドが沢山いるので不自由はないらしい
こんなお嬢様と一般市民の俺が知り合ったのは5才の辺りだった
高見沢の親父さんが経営する会社の系列に俺の親父が働く会社があり、ちょっとしたパーティーに上司の代役で参加した親父に連れてかれた時に初めて会った
今でも覚えている
両方の親父が難しい話をしていてつまらなさから二人で近くの椅子に座って時間を潰していた時の第一声が
「『つつもたせ』ってどーゆーいみかな？」
「・・・・・・わかんない」
「わかんないか」

今でも思うがなんつうガキだったんだか

そんなこんなで今でもこうして招待してもらっているのだ
でかい門をくぐった辺りで警備員に捕まったノイン
そりゃー三八式歩兵銃を持ってれば捕まるよ
警備員にノインを献上してさっさと屋敷に入る俺
「大和ぉぉぉ！大和の心は助けあいだよ～～」
こってり絞られろ脳なし精霊が

部屋に案内され軽くノックをする
「はいは～い。入っていいよ～」
中に入ると相変わらずの質素な部屋。８畳程の部屋に机と本棚、そして洋館に似合わない畳と布団

そして座布団に正座してにこやかに手招きするのはこの家の主、高見沢利下である。セミロングの薄い茶髪にほっそりした顔付きと柔らかい表情。大抵の場合は笑って過ごしている
「あれ？ノインちゃんは？」
「警備員に捕まったよ。三八式歩兵銃なんて持ってたから」
「へぇ～、三八式か～。撃ちたいな～」
なんか諦めるしか無いのかなこの子の性格は
なんて考えながら向かいの座布団に腰掛ける
「んで、何か用か？」
「別に。ただ暇だったから呼んだの。ノインちゃんも一緒だから庭で遊ぼうかなって」
すると軽くノックする音がする
利下の返事を聞き入ってきたのは執事さんと半泣きのノインだった
「守兵が拘束しておりましたので御連れしました」
ノインは泣きながら背中にしがみ付いてくる
「大和の心は助けあいだよ～。なんで置いてったの～」
「あれは間違いなくお前が悪いだろ」
「そんなんだから栗まんじゅう食べちゃうんだよ～」
「テメェェか食ったのは！俺の楽しみ盗った輩がぁぁぁぁぁ」
全力でホッペをツネってやった
「イタァァァァァい～！許して典時～」
そんなやりとりをニコニコしながら眺める利下だった

結局その後利下の好意により晩飯を御馳走になり、腹八分目（ノインの場合は米６合に相応のおかず）をしっかり守ったノインは俺の背中で熟睡している

部屋に戻りベットに降ろそうとしたが物凄い腕力と握力により不可。下手に剥がせば肋を持ってかれる恐れがあったので仕方なくそのまま寝てしまった
俺も甘いもんだ

「てんじぃぃ・・・・・マカロニつゆだく御代わり～」
「溺れちまえ」

もう寝よう

一話！――脳無し精霊（後書き）

さて皆さん、それでは早速御便りを読みます
ペンネーム匿名さんからです
『我家に押し掛けてきた迷惑このうえない馬鹿はどう処理すればいいですか？』
う～ん、中々良い御便りですね
ズバリ愛です！そのプリティーガールをこよなく愛する事で全て解決なのです！
匿名さん、一度二人っきりで夜の夜景をみたらどうです？

それでは皆さんまた来週～。バイバ～イ

二話！――金欠教師襲来（前書き）

チャラチャチャ～

こんにちは。ＮＮＮの時間です！
早速今日は一枚目のおはがきです。
「ピタゴラスってどんな人なんですか？」
ん～、良い質問ですね～。ピタゴラスは昔チュニジア辺りで畑作をしていた農業の人なんですよ！もうジャガイモをザックザック掘ってたんですよ～。じゃあここで一旦ＣＭで～す

二話！――金欠教師襲来

いつも通り適当に授業をサボり屋上で昼寝をする俺

既に教師からは問題児とされているが別に喧嘩も万引きもやらない。
そんなつまらない事をする程ガキではない
ただ授業がつまらないだけだからサボっているだけだ

暖かい日射しと心地よい風。気持いいもんだ

すると誰かが屋上に上がって来たらしく、鍵を掛けた戸を押したり
引いたり叩いたりひっかいたりしている
そして何かを試みる度に
「あれれれ～？」
や
「う～んう～ん」
や
「チェストォォォ！」
等の奇声も聞こえる

面倒だが悪い人ではない。仕方なく鍵を開けてやった。そして開け
ると同時に勢い良く扉が開き、栗色の髪と垂れ目に小柄な体格。ち
ょっと大きいスーツを着た問題教師がタックルしてきた
「はわわわわ～～。扉が急に開いたです～。まだアバカム使ってい
ないのに～」
「おい佐々木先生。妄想と現実をブレンドするな。今すぐリアルに
戻れ」

佐々木と呼ばれた教師は顔を上げて首を傾げる
「あれ？なんで作間君がここに居るんですか？まだ二時間目の途中ですよ？」
「サボりだ。ついでに言えば二年C組は今アンタの授業の筈だが？」
「まったまた～。今日は水曜日で二時間目はお休みですよ～」
「今日は火曜だ」
「・・・・・・マジ？」
「マジ」
「ひわわ～。先生遅刻ですよ～！」
「早く教室に走り去れ金欠教師。ついでに部屋のゴミは早く捨てろ。どうせ捨ててないだろ」
「む～。もう捨てましたよ！」
頬を膨らます金欠教師は腰に手を当て見上げてくる
「学校つまらないですか？サボってばっかで」
「つまらねーな。少なくとも社会で使う事の無い知識を学んで上下決めるのは気にくわね～よ」
「ふ～ん。でも学校だけは必ず来ますね。やっぱり御師匠さん仕込みですかね～」
「言うな。その名は言うな」
すると学校に鳴り響く授業終了の鐘
「はぁぁぁ！しまったです！三日連続授業欠席でクラスの皆にラーメン奢らなきゃいけな～い」
泣きながら金欠駄目教師は階段を疾走していった

結局午前の授業を全てサボり、平然と昼飯を食べて昼寝。目が覚めた時には六時間目の終了の鐘が鳴っていた

そして当たり前の様に家に帰る。玄関の戸に手を掛け捻る
開け放ち最初の一声は
「ただいま」
そして一歩踏み込むと同時に奥の部屋からノインが突進してくる
「おっかえりぃぃぃ～」
しかしノインの顔を見事にアイアンクロー
ノインは引っくり返った鮫の様にピクリとも動かず脱力モードである
そのまま奥の部屋に放り投げて冷蔵庫のコーヒー牛乳を飲み、ようやく部屋に入る
「酷いよ典時！流石にアイアンクローは無しでしょ！せめて熱いキッスプリーズ！」
「アホか」
部屋の隅で嘘泣きをするノインを無視して私服に着替えて台所に向かう
調理中ノインが『タマネギスラァァァァァッシュ！』と奇声を放ちながら高速で玉葱を擦りおろし、濁流の様に涙を流して奥の部屋を転がり回っている以外いたって普段通りの時間だった
さっきまでは

「ぴんぽ～ん」
何故かインターホンを押さずに戸の前で大きな声でベル真似をする奇妙な来客。俺はハンバーグを練る手を止めて考えた
居留守を使うか
しかし何も考えない馬鹿精霊はトテトテと玄関に走り確かめもせず

戸を開けた
「あれ～？おうち間違えましたかな？ここって作間君のおうちですか？」
金欠駄目教師と脳無し精霊の御対面だ
「あれ～典時、この人誰？」
「俺の学校の金欠教師だ。あまり近付くな、貧乏神病が移る」
「会って早々先生をイジメルんですか～！」
「へ～。貧乏神の先生なんだ～」
「うわぁ～、初対面でハード無礼ですよ！」
佐々木先生は大変御立腹の様だが無視しよう
「それで、こんな時間に何用だ。俺は晩飯準備で忙しい」
「むー。先生は君のことを心配して態々訪ねてきたんですよ。いっつも授業欠席でこのままだと単位落としますよ？いくら入試で上位になっても流石に無理がありますよ」
佐々木先生の上、沈みかけた夕日から視線を反らし先生を見下ろす
「素直に晩飯食べに来たっていったら今回は多目に見るが」
「ご飯下さい」
少し感動した。この素直さに

「いや～作間君、とってもお料理上手ですね～パクパク」
「当たり前よ！なんたって食通の私が認めてるんだからムグムグ」
「ん～ハンバーグのソースがピリカラで美味しいです～ハグハグ」

「ん～私好みの味だわ～流石典時モギュモギュ」

二人は異常な速さでハンバーグを食べている
どちらも量は５００ｇ
さらに付け合わせのポテトサラダと茹でた人参５人前
もう無いよ
心の中でちょと泣きながらバスタを茹でてサラダを追加する
両手に皿を持ち部屋へ向かうともう皿は空である
「作間君、お代わりいいですか～？」
「典時～お代わり～」
「おい駄目教師に馬鹿ノイン、貴様等に遠慮はないのか」
『腹が減っては戦は出来ぬ！』
心の中で張り倒した

結局たらふく食った駄目教師は今更ながら聞いてきた
「ところでこの子誰ですか？」
遅いだろ聞くの
「あ～こいつは～」
言い訳を考えているとノインが手を上げて大きな声で言いました
「典時の親戚の～」
おお！馬鹿ノインがまともな返答を。これは馬鹿位は消してもいいかもしれんな
「精霊ノインちゃんで～す。よろしく」
全て台無しじゃんか！やっぱ馬鹿だこいつ
「へ～精霊さんですか～。可愛いですね～」
馬鹿ここにあり！
「精霊さんはやっぱり空からきたんですか？」

「そうだよ。秘密任務の為に御忍びで来てるんだからね」
嘘をつけ
ノインはオレンジジュース片手にフルーツに手を伸ばす
「ふ～ん。つまりエリート精霊さんですか～！へへ～」
大袈裟に頭を下げてみせる佐々木先生は先程のご飯の間々に何故か
クリームパンを食べていた
ハンバーグからクリームパン
人参からクリームパン
ポテトサラダからクリームパン

最悪だなこの教師

とまあ一時間くらい秘密任務の為に来た脳無し精霊は自分の世界を
惜し気もなく紹介し、金欠教師はただただ驚いていた

結局九時まで居座った金欠教師は、ノインと共に我家の食糧の４分
の１程度を食べつくし、ようやく重い腰をあげた

「いや～すっかり御馳走になりました～。おまけにお土産も頂いて
ありがとです～」
「おい待て、なんだその肩に背負った野菜は。勝手に持ち帰るな」
「う～。教え子が先生の小さな冗談分かってくれないよ～」
「ならば放せ。今すぐ野菜を返せ」
そるから玄関で死闘を繰り広げ、大根と葱で手を打った

「ねえ作間君、先生は君の事とっても凄い子だと思いますよ」
「何を唐突に」

佐々木先生はにっこり笑いながら下から見上げてくる
「だって先生が見る限り作間君は心も体もとっても強いと思いますよ。自分の考えを確り持って、それをする為の力もありますよ」
「・・・・・・」
ただの金欠教師かと思ったが少し見直した
「だからもう少し皆と一緒に頑張ってほしいです。もう少し授業に参加して他の先生を見返してやってください」
えへへ～っと笑う先生は子供の心を忘れていない珍しい大人なんだな
「そうすれば先生も嬉しいし食堂のおばちゃんからパンのおまけが貰えるんですよ～」
「この会話は俺が思っていたよりレベルの低い会話なんだな」
酷いですよ～と怒る駄目教師は帰る前に一言言った
「作間君も大変ですね～。親戚さんが天然電波さんで」
「典時！典時！今私物凄いイラッとしたよ！」

同族嫌悪だ馬鹿共

二話！――金欠教師襲来（後書き）

はいは～い。それでは次のおたよりです。
「頭が良くなるにはどうしたらいいですか？」

もう何ですこのおたより！遠回しに私を馬鹿にしてるの！
あ～もう腹立つ！
典時！お茶！角砂糖７個ね！
え？お茶に砂糖は馬鹿のすること？
なら典時！お茶！シロップ大さじ二杯！

三話！――馬鹿が馬鹿である意味（前書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃ～

こんにちは。N♪N♪Nの時間です
今日はスタジオに素敵なゲストを御呼びしました～どうぞ！

ん？何してんだノイン
もう典時、本番中なんだからしっかりしてよ
何言ってんだ。カセットテープに録音なんかして。さっさと片付けろきゃ～何暴露ってるの！もう一旦ＣＭ

三話！――馬鹿が馬鹿である意味

「ふんふふっふふ～ふふふんふっふ～♪」

よく分からない鼻唄を奏でながら超絶御機嫌なノインはスキップで歩いている

その後ろを歩くのが俺である

三日に一度の買い物も今では板につき、必要ない物は買わなくなった

「あぁぁ！見て見て典時！そこの食品コーナーの食い倒れ人形の帽子が３０００円だよ！」

「そうか、それはよかったな」

「買ってよ典時～～」

「却下だ」

「ねぇねぇ典時～」

「駄目だ」

「うわぁぁぁ～ん。典時のばかぁぁ。ケチィィィ！ドケチィィ！どうていぃぃぃぃ」

「あぁ？」

「いやぁぁぁぁぁ！典時マジギレぇぇぇ」

食肉コーナーで周りの視線を気にする事なくほっぺたをツネってやった

「ママ～。あれ何してるの～？」

「しっ！ゆみちゃん。アレは過激な愛情表現なのよ」

「あぁ？」
「ママ恐いよ～！」
「行くわよゆみちゃん！早く逃げましょ」
くそっ、反射的にやっちまった。そろそろ他のスーパーに買い物移転しようかな～
溜め息を吐きながらふと買い物籠を見ると何故か異常な量のお菓子
「『新発売！ポテポチップス・ソイソース、濃い塩味』なんだこの塩分濃度の高すぎる商品は！」
するとお菓子コーナーからノインは更にお菓子を持ってきた
「みてみて典時！こんなお菓子あったよ！『女の子が目玉焼きの半熟黄身をすする光景に興奮する大人な君の味・チェリー小少女（こうなご）！』だってさ！」
「今すぐ全て返して来い。さもなくば今後の貴様の飯は目玉焼きの白身の部分だけにするぞ」
「うわぁぁぁん。典時が最近妙に厳しいよ～」
それはお前が日々奇怪な行動に磨きがかかって来たからだ
とまあ結局普通に買い物を済ませて帰路に着く俺とノイン
隣でスキップしながら歩くノインは『チョコスティック俺の塩！』を口にくわえている
するとノインは公園の前で立ち止まった
「ねえ典時、あれって何？あのまるっこいの何？」
ノインが指差す方を見ると小学生がサッカーをしていた
「あれはサッカーっつう競技だ。知らんのか？」
「しらな～い。だってあたし精霊だも～ん」

少しは勉強してからこっちに来いよ
仕方がないので俺が知ってる知識を分かりやすく教えてやった。そしてノインはというと・・・・・

「ヘイパ～ス！」
「うわぁ、飛び入りしてきたネエちゃん無駄に速え～！」
「大人気ねーぞあいつ」
「ホホホホホ。所詮負け犬の遠吠えよ～」
大人げないノインは豪快なドリブルで４人抜きを決め、ゴールである二本の登り棒に向かって足を振り上げた
「くらえぇぇ！プリティカルシュートォォォ！！」
サッカーボールが三日月みたいに湾曲する豪快なシュートはキーパーである眼鏡少年に向かって凄まじい速さで飛んでいった
何故過去系でお伝えしたか。それは既に眼鏡少年の顔面にボールがクリィティカルしたからだ

顔一杯に拡がったボールは少年から離れ、少年は綺麗に吹っ飛んだそのまま砂場に突っ込み砂を巻き散らして少年は止まった
誰一人動く事なく眼鏡少年を見ている
主犯のノインはキーパーに弾かれたボールを再び豪快にシュートしていた
「ゴォォォォル！私の勝ちよ典時！」
俺は全力でノインの元に走り掴み上げる
そして回るジャングルジムの中に放り込んで全力で回した
「にょぉぉぉぉ！飛ぶ～！吹き飛ぶ～～」
容赦なく回し続けた

大回転するジャングルジムを後にして、被害者の眼鏡少年の元に行く。幸い少年の怪我は大した事無いようで、眼鏡も傷一つないのが奇跡である

「すまん少年。お詫びにあのジャングルジムを好きなだけ回していいぞ」

「ちょょょとぉぉぉぉ！！やめてぇぇぇ飛ぶ～。気持悪い～～」

俺はノインの悲痛な叫びを無視して少年達にあげるジュースを買いに行った

5分ぐらいして帰ってくると回るジャングルジムに足だけ引っ掛かったノインがぶら下がっている

少年達が回すと遠心力に任せてノインの体が浮かび上がる

遊園地等にある回る空中ブランコを想像してもらえれば分かりやすいだろう

するとノインの命綱の足が外れたのか、道路に向かって一直線に飛来。白眼のノインが自力で蘇るとは余り思えないので仕方なく一足先に落下ポイントに走り受け止める

ノインの意識は全く無いので脇に抱えてそのまま帰った

部屋に戻ってノインをソファーに投げて晩飯を作る。今日はあっさり醤油ラーメン

具材も豊富に揃え、鰹節と煮干をベースにしたスープ。麺は極細のちぢれ麺にちょっと珍しいほうれん草を練り込んだ野菜麺

白眼のノインだってスープの時点で復活し、背中にしがみ付きながら鼻唄を歌っている

「ふふふ～ん♪ふんふん～♯ふふっふふ～♭」
おいノイン、鼻唄で♯と♭はどう表現してるんだ。全く分からんぞ
「典時～～まだ～～まだまだ～～～まだまだまだぁぁぁぁ？」
「ウッサイわい！少しは静かに教育テレビ見てろ！今『突撃取材！デーモン小〇閣下の素顔に迫る』が放送してるから」
「マジで！」
ノインは一目散にテレビに駆け付けスイッチをＯＮ

「いや～流石は閣下。いつも素晴らしい解説ですね」
「いやいや。それほどでもありませんよグハハハハ」
するとカメラの向こうからイーと鳴く怪人の手下ＡＢＣが濡れたタオルを持って走ってくる
『イー！イー！』
「な！なんだお前達！止めろ！顔を拭くな・・・・メイクが・・・・あぁぁぁぁぁ」
突然画面が変わりＣＭが流れた

「こら～～！肝心なトコでＣＭ入るなぁぁ」
大変御立腹なノインはテレビを消して自分の靴下を起用に丸めて即席ボールを作り、器用にリフティングを始める

何故テレビの怒りがリフティングに変わったのかは不明だが騒がれるより遥かにましなので触れずに行こう
それから普通の食事（ノインは麺５玉が普通）を済ませ先に風呂に入る
途中お背中流しま～すと奇言を放つノインから扉を死守し、風呂の

交換を伝えると何を血迷ったのか
「よしきた～！」
と叫びその場で上着に手を掛ける馬鹿を風呂場に叩き込んで長い一日がようやく終りを告げた
まったくいくらまな板みたいにペッタンコで子供だからって少しは常識を持って・・・・・
「有るわけないか。あの馬鹿精霊に」
深々と溜め息を吐き自室に戻って棚から読み欠けの本を取り出す。栞挟んだページを捲った瞬間風呂場でノインが叫んだ
「ヘルプ～！ノイ～ンヘルプ！！」
仕方なく本を閉じて風呂場に向かう
「どうした？シャンプーか何か切れてたか」
「お願い！一人淋しいから一緒に入って！」

俺は容赦無く風呂場の電気を消して　その場を後にした
後ろで物凄い悲鳴が聞こえる気がしたが全力で無視した
それから数分して泣きながら部屋に入って来たノインは、膝をポカポカ叩きながら色々と言って来た。やかましいので口にスルメを突っ込んでやったら隣でおとなしくなった

「ムキュミキュ典時・・・・モキュモキュ」
「なんだ？」
「お手紙みゅきゅきゅ」
ポケットから取り出された灰色の便箋を渡してくる。差出人の名前も無く、妙に厚みがあった
「なんだこの便箋は」
「それ？天界からの手紙だよ」
「何？天界からだと」

少し用心しながら封を開ける。中には何故か万札の束が入っている。
軽く見ても２０万はあるぞ
そして手紙らしき紙が一枚
『食費代』

・・・・・何と無く天界に住んでる人と上手くやって行ける気がした

三話！――馬鹿が馬鹿である意味（後書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃ～！

はい、先程は電波の影響で雑音が混じりましたが大丈夫ですか？
ちゃんとした場所で収録してますよ！ろ、六本木ビルスでやってますからね！
あぁ！信用してないな！絶対信用してないな！

うわぁぁぁん。典時～、皆がイジメル～

そりゃお前が悪いからだろ

典時もイジメル～～～

四話！――精霊神話・・・乙女の戦記、第一章（前書き）

キュッキョッキュキュ！キュキュッキュ

ヘイ！皆元気か～い？
ＤＪノインだゼ！
今回はスペシャルな紹介だゼ
なんとイラスト依頼をして直ぐに来てくれた人がいたのさ
その名は東堂要さ～ん！サイコ～だゼワオ！
マダマダ応募は続くから皆ドンドンチェッキングだ
それじゃここで一曲。精霊シスタ～ズで『ビバ・洗濯機』チェケラ～！

四話！――精霊神話・・・乙女の戦記、第一章

「典時～、てんてん典時～。典じじ～」
相変わらず無礼千本で部屋に飛込んでくるノイン
「ねえじじ～」
「誰がじじ～だ！」
「え？典時だよ」
会話成立しないが取り合えずツネッておいた
「いったぁぁぁぁ！今日はまだ二回しかイタズラしてないのに」
追加で見せしめの刑を執行した
見せしめの刑とはノインの前で何かを食べる事である
「て・・・・典時・・・・・それちょうだい」
今回はノインが勝手に買った手作りゼリーセット『呪いの藁人形セクシーダイナマイトバージョン』たる意味不明な菓子である。因にプリン味
無視して食べてると仔猫の様な眼をして此方を見つめるノイン
しかし口は肉食動物並に獲物を狙っている
「ヨダレを拭けって俺に拭くな！何が『ジュルリ』ってワザとらしい音出しとんじゃい！」
「じゃあちょうだい！」
俺は天罰チョップをかましてやった
それから5分位床をゴロゴロ転がって悶絶したノインは漸く最初の話題に戻った

「で、何の用だ」
「んとね、手品見せにきた！見てみて～」
ノインは左手の甲を此方に向けて横にし、右手の親指を中指と人指し指の間に入れてグーにする
そして右手の親指の辺りに重ねて・・・・

「はあぁぁぁぁ！」
気合い一杯に親指の切り放しマジックをやってのけた

「ねえ典時！どうだった？どうだったって何でコッチ見ないの？何で目を細めて遠くを見てるの！典時ぃぃぃ～」
「いや、なんつうか・・・・・惨めで」
「ヒド！典時ヒドっ！」
ノインはふてくされて人のベットでフテ寝を始めた

因に今は午前3時だった

「どうした作間、眠そうだな～。珍しく授業に出てるのに」
「すいません」
俺は基本的に将来役にたたない授業はサボッている。しかし英語や嫌いではない体育等はある程度真面目に受けている
「ん～。作間が私の授業中に寝るなんて私は悲しいな～」
目が隠れる様な長い黒髪にこれまた上下黒いスーツの英語教室、須藤摩邪（すどうまや）は劇団風に床に崩れ嘘泣きを始める
しかしそこまで応対する程体力と気力の無い俺は取り合えず眺めてた
「・・・さくまぁぁ・・・・・悲しいな～」
「そうですか・・・・・・すいません」

なんか本当に悲しそうな目でこっちを見てる
「あぁ～・・・・・、元気だして下さい」

「なら元気になる為に授業寝るな。後明日手作りお弁当求む」
何故か無駄な要求を突き付けられたが断ると後が面倒なので承諾してしまった

そして昼休みになり学食のジャンボクロワッサン（直径２５ｃｍ）とシャイニング苺（只のイチゴ牛乳）を飲んでると突然不吉な雷光が脳内に轟いた
ゆっくり校庭に視線を向けるとそこには超怪しいジンブツが侵入しようとしている
左右しっかり確認し、忍び足で校門から侵入しようとする奴
もう一度言おう。校門から侵入しようとしている

まてまて、何故にあ奴が此処に来ている

薄緑の髪に黄色ネクタイ、赤いジャケットを着こなす天下の大泥棒、ノイ～ン三世がいた

俺は烈火の如き速業で階段を降り、ノイ～ン三世の頭を鷲掴みにして一旦外に運ぶ

「何してんだ！」
「おお、典時のとっつぁ～ん。よ～くわかったな～」
本物の大泥棒みたいなしゃべり方をするノイ～ン三世を取り敢えずひっぱたいておいた
「いった～！痛いよとっつぁん」
「まだ続けるかこの阿呆が！今すぐ帰れ」
しかしノイン三世は引き下がりません。何故ならノイン三世はこの

学校にはこびる悪の手先を滅滅滅滅！しなければならないのです
「そうよ典時のとっつぁん、今こそカリオすトロの封印を解き放ち悪の帝王まモウを倒すのよ」
「その前に一旦病院に行け。５年ぐらい精神科に居ろ」
しかしノイ～ン三世は引き下がりません
この世に悪が居る限り、ノイ～ン三世は　戦うのです

すると校舎の方で地響きが鳴り響く
振り返ると校舎の壁がパズルの様に次々と剥がれ落ち、中から現れたのは
「まさかのコンバト○ーＶ！何故太古の遺産がこんな所に！」
「遂に現れたわね魔神コメッタさん！今日こそ闇に葬ってあげるわ！」
「まてまてそこの阿呆。最初のカリオすトロとまモウは何処に消えた。さらにコメッタさんってアレの事か？」
「典時！何ふざけてるの！ここは戦場よ！」
「お前が俺にツッコミか！腹立つな」
いつの間にか黄金の剣とジャングルの奥地に居そうな部族の着ける木の仮面の盾を構えるノインは空に向けて剣を翳します。すると剣から炎が吹き出しコンバトラ○（コメッタさん）を囲みます。アレはきっと覇者の剣に違いありません
しかしコメッタさん（コンバ○ラーＶ）も黙っていません。ヨーヨーを振り回し襲いかかって来ます
ノインは数十のヨーヨーを次々と避け、もう一度剣を翳し、炎を浴びせます

そんな攻防をただ眺めてる俺は、正直帰って寝たいです

「これで終わりよ！パラメロッタ４世、土に帰るがいいわ！」
もうツッコむのも疲れますのでスルーしましょう。ノインは高々と剣を掲げ、コンバトに剣を突き刺しました

コンバは身体中から火花を散らし、崩れ落ちました。コンの残骸に立つノインは涙を流し叫んだ
「顕微鏡で使う超薄くて四角いガラスなんだっけ～！」

俺は妙な圧迫感で目を覚ました
そこには熟睡するノインが俺の上でうつ伏せになりながら寝ていた。
そして何故か俺の首筋を甘噛みしていた

そしてゆっくり顔を離し、俺の顔の正面に移動すると大きく口を開き迫って来た

午前3時、俺は久しぶりに本気でノインに頭付きをかましてやった

四話！――精霊神話・・・乙女の戦記、第一章（後書き）

ヘイ皆どうだった？なかなかスリリングな曲だったろ？　ちなみに今回のサブタイトルも精霊シスタ～ズのデビュー曲『眠らない乙女』のサビの部分だ

「おいノイン、さっきから皿を擦って何やってる。さっさと返せ」
ちょっとＡＤ、本番中に何してんの！早く引っ込んで

「またラジカセに変なの吹き込んで」

きゃぁぁぁぁ！何経んな事言ってるの！ココは六本木ビルスの特設ステージなんだからね！ホントなんだからね
アレ、カメラさん、何で離れるの。戻ってきてヨ！一人にしないでヨ～～～！

五話！――Ｎｏｉｎ　ｏｌｄ　ｄａｙｓ　ｓｔｏｒｙ（前書き）

チャラッチャッチャッチャ～

こんばんは。ＮＮＮの時間です。今日は山田太一君からの質問『天界ってどんな所ですか？』に答えたいと思います

天界は地球とは一つズレた世界なんです。基本は地球と変わらないんですよ。まあ皆空飛んだりしてますがね

他にも地集界、水凝界、炎帝界ってあるんだ。あ、確か他にもう一つ在るってママが言ってたっけ

それじゃ続きは後半で

五話！――Noin　old days　story

「むか～しむか～しあるところに赤い鬼がいました」
突然語り出したノイン日本昔話。俺はもうこいつの突発的奇行には慣れてきた
「赤鬼の名前は吉田勇一。中流家庭に生まれたごく平凡なサラリーマンです。そして吉田には家族も居ました。仲慎ましく愚民共からの略奪生活をエンジョイしています」
のっけから物騒極まりないな
「しかし愚民の中には稀に屈強な愚民が産まれ鬼社会を揺るがしていました」

ノインの語りに熱が入りドンドンヒートアップしていく
「そこに現れたのは青鬼の留吉郎です。彼は従来の略奪生活に新しい道を作りました。それは集団戦闘です。留吉郎は資金を集め武器を作り、統率の取れた戦闘を行えば城の一つや二つ楽に落とせると皆に広めました。鬼は喜び募って資金をだし会いました」
あ、そろそろ野菜関係食べないと傷んでくるな～

ナレーター
「それで皆さんは青鬼さんに資金を渡したんですね？赤鬼の吉田（仮名）さん」
（※音声の一部を変換しております）
「ええ。皆よろこんで出していました。中には千両も出した奴もいましたから。それがまさか詐欺だなんで誰一人疑ってませんでした」

「・・・・・・・・おいノイン。何の話だ」
「泣いた赤鬼」

「俺泣いた赤鬼の話覚えてねーけど今のは絶対違うからな」
「え～！そうなの？天界じゃこんなんだよって保育園で教わったもん」
くそっ、天界への情報伝達してる奴誰だよ
「じゃあ他はどんなのがあるんだ」
「え～と、桃太郎もあるよ」

むか～しむか～しあるところに鉈を片手に山中を駆け回り、出来の良いタケを狩る鬼爺さんと川上から川下の村々に向けて菌類細菌類を含んだ洗濯物を洗う鬼婆さんがすんでいました

鬼婆さんが洗濯をしているとドンブラコ～ドンブラコ～と効果音付で桃が流れてきました
鬼婆さんは通り過ぎて行く効果音付の桃の効果音を聞いて『ドップラー効果』と名付けました

「え？桃太郎拾われないの？お婆さんが著名になって終わり？」
「まだまだ続きがあるよ。大人しく聞いてなさい」

桃は川を流れること3日。中の赤子は桃を食べ逞しく生きていました
すると見知らぬお婆さんが桃を拾い、家まで持って帰りました

お婆さんはお爺さんの前に桃を置きます
お爺さんは刀を持つと気合いの雄叫びと共に桃を居合い斬りしました
しかし刀は中心を通過せず何故か止まりました
中では赤子が鬼の形相で刀を白羽取りしています
「ふっ、やるな小僧。よかろう、今日よりお主はわしの弟子じゃ」
桃太郎と名付けられた赤子は血の滲む修行に１５年耐え、遂に師を越えたのでした

「桃太郎、最後の試煉じゃ。此より鬼ヶ島に向かい鬼をこらしめ財宝を奪い返すのじゃ」
お婆さんは秘密のきび団子をくれました。お婆さん曰く、絶対自分で食べるなとの事だ

桃太郎が鬼ヶ島に向けて出発して間も無く、一匹の犬を見付けました
桃太郎は素通りしました

犬は悲しい目でこちらを見てきますが無視しました
何故なら所詮犬だからです。犬にすら負ける鬼などゴミなのです
「犬よ。コレをあげるから家に帰りなさい」
それはマル秘きび団子です。
一口で食べた犬の目はキュピーンと輝きます
勢いよく二足歩行になり四肢を内側に折りたたみ、鋼のボディーが体を覆い、頭を前に倒すと内側からロボフェイスが現れたのは
「トランスフォーマー！ドックラック見参！」
マル秘きび団子は科学の結晶でした

「よし、家来一号にしてやろう」
桃太郎は現金に育っていましたが無視しましょう

その調子で残り二匹の家来を捕まえ、遂に鬼ヶ島に着きました

「たのも～！」
桃太郎は声高らかに叫びました

一方鬼ヶ島では

「大将。そろそろ改築しませんかね」
「それもそうだな。ここ数年節約に励んだしたまには贅沢するか」
大将は島中の鬼を集め久しぶりの宴会をすることにしました
鬼達は毎日毎日節約に励み、各村々を回って奉仕活動をし、賃金を貰って生活してるのです

たのも～

おや？誰かがやってきたぞ。鬼達は門の方を向きます

二匹の門番が駆けて行こうとした瞬間門の隙間から輝く光が溢れ出る

「鬼共。終幕の金が鳴り始めたぞ」

「めでたしめでたし」
「めでたく無いって。もう子供にそんなの教えたらいかんだろ！」
魚を返しながら鍋に野菜を加える。あ、醤油醤油～

ノインはえ～とか言いながら部屋を転がり回っている

ズゴン

あ・・・・・・痛そ～
「・・・・典時・・」
めちゃめちゃ泣きそうな顔でこっちを見てる
「今の気持ちを言ってみろ？」
「泣いたノイン」

結局ノインは泣きました

五話！――Ｎｏｉｎ　ｏｌｄ　ｄａｙｓ　ｓｔｏｒｙ（後書き）

は～い。それじゃ続きだよ～
私達は世界の事をまとめてホラルって呼んでて各々が役所を持ってるの
ちなみに天界は地球の気象関係なんだよ。台風とか台風とか台風とか

「あらノインちゃん。こんなとこにいたの？」
ま、ママ！何でここに！なんでスタジオに来てるの？
「スタジオ？ここって作間さんのお部屋じゃなかったかしら？」
うわ～ん。ママ空気読まないよ～

六話！ーーダイナマイトフェスティバル〈開幕の鐘〉（前書き）

チャラッチャッチャッチャ〜♪

ってあれ？ディスク（ラジカセ）は？
ちょっとディレクターディスクは？
「あ？今盛り付けしてんだから少し静かにしとけ」
ちょっとディレクター。仕事してよ〜
「黙れ」
グスン

六話！ーーダイナマイトフェスティバル〈開幕の鐘〉

ぴんぽ～ん

気の抜けたベルの音に頭を上げる

昼過ぎの来客とは珍しい。まさか金欠教師が昼飯までたかりに来たのか？

隣で爆睡するノインを放っておいて玄関に立つ

「どちら様ですか？」

戸を開け放つと一人の女性が立っていた

「初めまして作間さん。ノインの母、パラノアと申します」

また問題が発生したか

居間にて対峙する俺とパラノアさん、そしてやたらとガタガタ震えるノイン。もう上下の落差が５ｃｍ近くなっている

しかし何がノインをここまで震えさせるのか

あれか？パラノアさんの肩に乗ってる妙な小動物か？しかしアレはアレで可愛いんだかな

「まふ～～」

小動物が鳴いた！まるっこい真っ白毛玉に猫みたいな耳。小さい金色の目がパラノアさんに何かをねだっている

「あら、お昼の時間だったわね。ほら、お食べ」

パラノアさんは懐から銀色のビー玉みたいなのを取り出し宙に投げるするとまふ～と鳴いた小動物はキュピーン瞳を輝かせ肩から飛びあがり、モシャモシャの口を一杯に拡げた

トラウマになりそう

剥き出しの牙に糸引く唾液、伸びる舌は標的のビー玉に絡み付き獲物を完全に捕獲した
ちなみに大きさは野球ボール程なのだが口を開いた途端内側から溢れでてきたのだ

口が

そして俺は見てしまった。口の奥、暗闇の中に煌めく眼光・・・・・・

バグン！

「（ガシュッガシュッガシュ）まふ～ゃ」

これは確かにノインが震えるのが分かる

「そ、そそそそそそそそそれでママママ！何でこっちにににに来たの？」
ガタガタ震えまくるノインはなんとか人語を話している。若干聞き取り辛いのは無視しよう
「あらノインちゃん、お手紙送ったじゃない」

にっこり微笑むパラノアさんはテレビの上にある封筒を指差す
はて、あんな所に封筒なんてあったかな？
「ノイン、手紙が来てたって気付いてたか？」
「ううん、おかしいな。天界からの手紙なら気付くのに。あれ？この封筒って・・・ママ！」
「あら、これって見たら忘れる封筒だったわ。ゴメンねノインちゃん」
なんだ、そのデメリット満載の封筒は
ノインは早速手紙を読み出した
「は・・・はいけい？明日行きます」
「わ～ノインちゃんが拝啓って読めた～ママ嬉しい～」
親馬鹿全開のパラノアさんは手を叩いてはしゃいでいる

とまあそんな訳で二者面談みたいな事になったのだがノインは相変わらずガチガチに緊張している

「で、パラノアさんは何で来たんですか？」
お茶菓子を置き、腰を降ろす。直ぐ様ノインがしがみ付いて来たので隣に無理矢理座らせた
「やっぱり我が子が知らない所で生活してると思うと不安でしょ。だから見に来たの」
渋茶を啜るパラノアさんは目を細める
「悪い人の所にでも居たなら・・・・ねぇ」
完全に眼が笑っていない。殺る気満々だなこの人は。ノインもまたガタガタ震えだした

「でも安心。作間さんって凄い良い人みたいだから」
また微笑むパラノアさんの眼は元に戻ってくれた

「それでね、逆にノインちゃんが迷惑掛けてないか心配なの。作間さんってとっても優しいから」

その瞬間隣で短い悲鳴が上がり、他の部屋に逃げる足音が聞こえる
「それで、ノインちゃん何か迷惑掛けてないですか？」
「て、典時！後生だから！後生だから穏便に！」
ちょっと聞こえ辛い救済コールが後方で聞こえる

「ええ。ほぼ毎日何かしらやらかしてますよ」
「てぇぇんじぃぃぃぃ！！おに！」
これでこいつにゃいい薬になるだろ
「例えば昨日寝てたらいつの間にか部屋に侵入して俺をカジってました」

「みぎゃあぁぁぁ！」

後方が一瞬光り、妙な奇声が聞こえる
振り替えると襖から此方に尻を向けているノインがプスプス煙を上げている。はしたない子だ

「他に何かありますか？遠慮せず言ってください」
「公園で小学生の顔面にサッカーボールぶつけました」

みぎゃあぁぁぁ！

「夜中意味もなく起こして悲しい手品見せてふて寝しました」

むみゃぎぁぁぁあぁあ！！

「知り合いの家で無礼千万やってます」

むぃむみぎゃあぁぁぁあぁ！！

「あと先月の食費が８万超えました」
「それはいつもの事ですよ。あの子育ち盛りですから」
「でもこの前パラノアさんの料理はちょっとしょっぱいって言ってました。あと種類が片寄ってるって愚痴ってます」

それ言っちゃダみぎゃぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁあ・・・・・・

もう一度振り替えると襖から此方に尻を向けてプスプス煙を上げているノインがいる
時折ピクンピクンと痙攣してるが無視しよう

「ま、そんな所ですかね。小さいのは省きましたが」
「あらあら〜ノインちゃん久々に壊れたわね〜」
全身から帯電した電気をパチパチと鳴らし、爆発した髪と煙あげる服でクルクル回っている

パタン

あ、倒れた

「あはははは、あはははははははははは」
「ノインちゃん楽しそうね～」
冷たい視線でパラノアさんを見てるとカメラを取り出し実の娘を激写している
天界は恐ろしい所だ。少しでも上手くやって行けると思ったが大間違いだ

「それで、パラノアさんはその為だけに来たんですか？」
ノインを未だ激写し続ける親馬鹿は首をかしげ此方を見る
なんだその『何言ってるのこの人？』的は表情は
「違うわよ～。ノインちゃんはついでだもん」
あ、ノインがものスゲー表情してる。雷に撃たれた様なってあんな感じなんだな

「ひっぐ・・・ひっぐ・・ひっぐ・・てんじ～。てんじ～！」
「分かった。もう泣くな。ほれ、鼻かめ」

ち～ん

「で、改めて何の用なんですか？」
「実はテンちゃんに危険が迫ってるの」

テンちゃん！いつのまにそんなフレンドリーな関係になったんだ！

「私達の世界は天地水炎の四界。それに死者の魂の循環を司る輪廻の園で構成されてるの。ほら、前ノインちゃんがテープに録音してたじゃない？」
「そういえばよく部屋の隅で皿を擦って一人言話してましたね」
「違うも～ん。それ私じゃないも～ん。悪霊だも～ん」
「テンちゃん、悪霊がそこに居るわよ！」
「悪霊ですね。取り敢えず3日飯抜きで祓ってみますか？」
「うえぇぇぇぇぇん！典時とママがグルになったぁぁぁぁぁ」

二人で無視した

「それでね、地集界の方でちょっと反発があったの。『地界を統べる我等の許可無く異族を送るな』って。本来なら手続きを踏んで期日内の限定でのみ許される行為なの」

「それを独断で行った結果ということですか？」

エレノアさんはお茶を啜りため息をつく

「旦那が熱血な所があって下界に突き落としたのよ。ほら、獅子は我が子を突き落とすみたいな」

「なら俺に代わって旦那さん殴っておいてくれますか？」

「オッケ～」

うわ軽いな～。旦那さんの家庭内地位が見えてきた気がする

「それで、具体的にはどう気を付ければいいんですか？」

その問いに首をかしげるパラノアさん

いや、あんたが首をかしげたら駄目だろ

「実は地集界がどう仕掛けるか分からないの。兵を送るのか地盤沈下起こすのかテンちゃん１０倍サイズリアル石像を出すのか検討つかないのよね」

切に最後のは止めてほしい。近所迷惑の代名詞を背負いたくは無い

「まあそんな所だから頑張ってね～。ファイト～テンちゃ～ん！」

「まふふ～♪」

そう言い残し一人と一毛むくじゃらは光の彼方に消えた

「典時。これって嵐が去ったって言うのかな？」

「いや。地震で言うと初期微動だな」

光に包まれた一人と一匹は置き土産と言わんばかりに盛大な突風を残していった

おかげで部屋がボロボロ。何から何まではた迷惑な家族だ

「ねえ典時」

「なんだ」

「次回は新キャラだね」

言うな！

六話！ーーダイナマイトフェスティバル〈開幕の鐘〉（後書き）

チャラッチャッチャッチャッチャ～♪

もきゅもきゅ。ディレクターお代わり～
「ね～よ。五人前しか作ってね～よ」

使えな～い

「明日から祓ってやろうか悪霊が。滅するぞ」
ひぃぃぃぃぃぃぃ！リアルモンスタ～テンちゃん！！！！！！

？「作間様、包丁を使われては後の料理に支障がありますので此方を」

鬼の青★竜☆刀♪
ぴぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ・・・・・・

七話！ーー新キャラキャラキャラロボメイド！（前書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃー！

Ｉ' ｍ　ｌｏｖｅ　ｉ' ｔ！

てへ♪やっちゃった！

さあさあ！遂に新キャラ登場よ！待望の果てに続く予想外の展開！

彼女は敵か！味方か！まさかの落武者か！

ただこれだけは言っとくわ

この番組は私の物よ！

七話！ーー新キャラキャラキャラロボメイド！

嵐が過ぎてから二週間過ぎた昼下がり。ベランダで洗濯物を干す俺は一応の警戒はしていた
いつ迷惑の代名詞が現れるか分からないからな

「典時、お手紙来たよ～。なんかやたらとゴージャスなんだけど」
「ゴージャス？ちょっと持ってきてくれ」
ノインから受け取った手紙は本当にゴージャスだった
散りばめられた金粉に小さいながらも希少な宝石で装飾されている
はて、まさか地集界から手紙でも届いたのか？
ゆっくり封を切り手紙に目を通す

『久しいな我が弟子！グレート師匠じゃ！』

その前文を読んだ時点で握り潰した。

「えぇぇ！いいの典時そんな暴挙しちゃって！」

「気にするな。いつものことだ」
「ならいっか」

そう言ってノインは一人オセロを始めた
しかも一人二役のセリフ付きかよ

ノイン
「ふっふっふ、お主も悪よの～（パチン）」

ノイン2
「いえいえお代官様程では（パチン）」
ノイン
「ぐはははははははは（ぺちん）」
ノイン3
「・・・・・（パチン）」

ノイン
「む、何奴じゃ！えいやっ！（ビシィィン！）」
ノイン3
「ぐはぁっ・・・（パチン）」

あれ？刺客かなんか殺された？

そんなどうでもいい疑問を頭に残して掃除機に手を伸ばすと電話が鳴り出した

ノインは未だに第2、第3の刺客を無情にも殺している最中なので俺が出る

「もしもし」
『初めまして作間典時様。ＭＧ－０００１型（家事全般及び仕付け調教何でも－－－－』
ガチャン

受話器を叩き付けた

電波か！それとも新手の宗教か？
嫌な汗を背中に感じ身震いする。多分来る
直後千錠されている筈の玄関が開き何かが聞こえる
「何でも来い）プロトタイプ精巧人形です。以後、御見知りおきを」
透き通る綺麗な声とセミロングの朱色の髪に純白のカチューシェ。
黒をメインとしたメイド服に身を包み一点張りの無表情。そして左
の袖には『一日一発の誤射』のロゴサイン

新手の変態か？
大変失礼ながら率直に思ってしまった
「因みにＭＧの略は萌えグレートだそうです」
変態確定

「え～っと君は・・・・・コイツと同じ？」
指差す先には未だにオセロ中のノインがいる
ノイン１
「ちょりゃぁぁぁぁぁ（バチィィィン）」

ノイン１９
「ぷぎゃぁぁ（パチン）」

メイドはノインを見て
「不愉快です」
正直だなこの子は
相変わらず無表情なメイドはスカートの両端を軽く摘まみ一礼する
「私の事は御自由に御呼びください」
と言われても、ＭＧなんて呼べないしあんな長い文では呼べんし・・・・・

「じゃあ1号さんで」
「了解しました」
「それからあのやたら長い名前は何？」
「主が取り敢えずやっとけだそうです」
「さいですか」

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
お互い無言で見つめ合う

ううむ。中々苦しいな

「あの・・・立ち話も何なんでどうぞ座ってください」
「御気遣い感謝しますが侍女たるもの、そのような態度で客人と接するわけにはまいりません」
「・・・さいですか」

ううむ、ううむ。苦しいな苦しいな
「いよっしゃ～黒の圧勝だ～。世の中やっぱり財力よ～」
オセロ台を引っくり返しながら叫ぶドアホは漸く1号さん気付いた
「・・・・新手の愛人！この節操なし！」
転がっていたオセロを額に思いっきり叩き付けた

悶絶するドアホを無視して改めて1号さんに向き治る
「アホは無視して下さい。それで、用件はなんですか」
1号さんはしっかりアホを無視してくれた
「私は『オウンビゾッド』此方の言葉で地集界の主、イマ様に御仕えしております。既に御存知の程と思われますがそちらのトゥアン・ダヌ・ノイン令嬢の母君、トゥアン・ダヌ・パラノア様から御報告されたようにイマ様に許可無く異界の者を住まわせた事に対し、私が派遣されました」
ノインは額にオセロを重ねてオセロタワーを積み上げている
「て、典時、そこに転がってるオセロ取って」
菓子を入れてた盆を面の方を叩き付けた
「甘い！放送ギリギリマトリX避け！」
いらん技能を付けたようだ。浅はかな
「1号さん」
「浅はかです」
1号さんはスカートの中から二メートル近い裁縫針を四本抜くと取り敢えずノインを床に標本見たいに押さえ付けた
「ええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！協定結んだよこの二人！」
綺麗に無視した

「作間典時様。主からの言伝てを御預かりしとおります」
そう言って1号さんはやっぱりスカートの中からゴッツイ機関銃を引っ張り出した。後に分かったがM4という自動拳銃だそうだ
そしてその銃の左側の側面には『そんな一発を貴女に』とロゴが書いてあった

「あ、袖の続きか」
一人納得した俺だが1号さんは相変わらずの無表情で銃口を向ける
「『痛め付けて分かって貰え』主からの言伝てです」
鼓膜を殴るような音と共に部屋に無数の弾痕を作り上げた

「いいいいいいヤッホォォォォォォォ！！」
只今五階からダイビングしてます

「つうか何で私の頭下に叩き付けようとしてるかなぁぁぁ！」
「死にたくなかったら必死に浮け！」
「悪魔やろぉぉぉぉ！」
お、浮いた浮いた

鼻水ぶったらして泣きまくるノインを背中にくっつけてバイクに股がる。アクセル全開で公道に飛び出しひたすら町外れに向かって走り出す
後方から軽い地を蹴る音とやたら派手な発砲音が聞こえる
無視だ。例え隣の車が急に操作を失って高速回転して玉突き事故をしてたとしても無視だ

御請求は地集界へ

山道を走り抜け獣道を飛び出すと広い草原に飛び出した

懐かしいな。よくここで変人師匠と稽古してたもんだ

「うぁ・・・おはよ典時・・・・・・ご飯？」

「よしよしノイン。取り敢えずそこに生えてるキノコを食べてみろ。笑いが止まらん美味さだ」

「マジ！きゃっほ～♪」

愚か者め

さて、いつの間にか1号さんが追い付いて来たらしく丁寧に獣道を伐採して歩道を作ってくれたようだ。一応お礼を言うべきだろう

「作間様、御覚悟はよろしいでしょうか？」

軽い跳躍で2m近く飛ぶ1号さんはその場で停止した。ノインと同族か？

「不愉快です」
「すまん」

1号さんはいきなりゴツい銃を発砲した。ギリギリで軌道から逸らしてみたが奇妙にも銃弾が停止していた
「私達地集界で造られた精巧人形は内部に空間操作を可能とする秘核炉を保有しております。空間固定を可能としとおり、この様に浮くことも可能です」

指を鳴らすと真横を通過する銃弾は頬を掠める
「それでは参ります」
宙を蹴り一直線に飛来する1号さんは拳を構え突き出す
左に身を投じて避け直ぐに追撃を始める
近接武器の類いを持っていないのか、互いに素手の攻防を続ける

腕を弾き懐に潜り込もうとするも空間固定のせいか手前で弾かれる。しかし接近戦はこちらの方に分があるようで1号さんの攻撃軌道も予測出来る

互いに一歩も退かぬ攻防を繰り広げる中で早速と此方に走ってくる輩
「てんじぁはははははははは！！」
跳び跳ねクルクル回るノインは周囲に突風を撒き散らしている
「このキノコもはははははははは・・・・・ひぃ、ひぃ、ひぃ、ひぃお腹いたいひひはははは！」

ぼふ～んぼふ～んと盛大に辺りの木々を薙ぎ倒す厄災は　遂に俺と1号さんを直撃した

なんとか1号さんを庇ってみたものの、頭をかなり強打した

よし、取り敢えずつねるか殴るかするか

「ん、1号さん、どうした。そんな不思議なマジックハンドを持って」

「作間様、御察し下さい。いくらトゥアン・ダヌ家の御令嬢であっても流石に・・・・・」

暫し見つめ合う二人は固く握手を交わし、武器を片手に進む

「あはははは・・・・ひひ、苦しい！キノコ怖いひひはははは！はははははは典時、何二人してこっちにひぃ、ひぃ、ひぃ、ひぃ・・・・・ヒィィィィィィィィィィひはは・・・・」

1号さんと一緒にお昼ご飯にすることになった
「準備いいね1号さん」
「はい。今回はお出掛け用スカートなのでお出掛けシートも収納しております。昼食がスーパーソロモンの『刺激激し過ぎ！激激二倍なメロンパン！？もう止まらない♪』ですがご了承下さい」
「あ、いいよ。そのパン辛くて結構好きだから」
1号さんが入れてくれた緑茶を啜り遠くの木に目をやる
何かが吊るされているが所詮ただの景色だ

「あ～、そう言えば和んでたけどノインの件どうすんだ。やっぱり決着つけっか？」
すると1号さんはポケットから小さな九体を取り出してグレネード砲にセットしてノインの居る方に発射した

「いたぁ！」
精密射撃だ

『いようトゥアン・ダヌ家のガキんちょ。イマ様を覚えてっか？ん？相変わらずまな板だな。ん？あの頃のパラノアはもうCカップだったのによ。ん？しっかし寝癖頭スッゲーな。リンスしろリンス！トリートメントは女の必需ひぃんっ痛！噛んだ！舌噛んだ！ん？お前何放置プレイ勤しんでんだ。そりゃ俺の特権だ！ん？おお！遠く彼方に居るのは０００１じゃねーか！ん？隣の若造！テメー俺のメイドのスカートの中見たら俺に写真送れ！必ずだぞ！』

なんだあいつ
見た目は渋谷辺りに居そうなナンパ野郎だがうっさいな
「典時！コイツ消してよ！シツレイ極まりないもん！」
『テメーが言うなまな板！ん？』

うっさ
「彼方はイマ様。地集界最高位の方です」
「位は最高でも生物的に最低だろ」
「はい」
『テメー毒舌派か！ん？つうか話逸れたぞバカ野郎！つうわけでノイン！テメー許可無く家の敷地入りやがって。ん？期日明確にはっきり言えや。ん？』
「私と典時がラブラブランデブ～で添い遂げてアッツアツ新婚生活満喫して同じ墓に入るまでよ！文句あっかこのシスコン野郎！」

根も葉も無い暴言！

『なんで知ってんだ俺がシスコンだって！ん？？まさか政府の回し者か！ん？それとも嫁の仕業か！ん？』

シスコン野郎かよ！

正直置いてきぼりの俺と1号さんは呑気に騒がしい輩を眺めている

あ～平和だな

「作間様、申し訳ありません。主が騒がしく御迷惑御掛けして」

「あ、気にしなくていいよ。いつもうるさいから。それと何だかんだ言って結局許可したみたいだね」

何故か和解したらしく握手を交わした騒音×２は笑いながらやって来る

つ～かキツく縛ってた筈なんだかな

『おう若造。まな板の件は了承した。ん？その代わりお前にちいと頼み事だ。０００１を住まわせてくれ。ん？まあ社会見学みたいなもんだ。ん？』

「拒否権は？」

『ある』

「なら」

『だが断る！』

俺は全力で球体を蹴り飛ばした。

結局1号さんは我が家の新たな家族になった
炊事も掃除もこなしてくれるので大変役立っている

「ノイン様。食事中にテレビを見ながら漫画を読んで爪を切らないで下さい」

ガシャ

ドパララララララララララララララララララララララララララ

あ〜あ。また壁紙張り替えないと

七話！ーー新キャラキャラキャラキャラロボメイド！（後書き）

ぴんぽをぽんぽ～ん

御初御目に掛かります。地集界産、ＭＧ０００１型精巧人形です
作間様から１号と命名されましたので以後お見知りおきを

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

会話！会話が無いよロボメイド！視聴者とのコミニケーション！そしてこの番組は私の物よ！

ノイン様、カセットテープ相手に悲しくありませんか？

ひっぐ、ひっぐ、うぇぇぇぇぇぇん。ロボがイジメるぅぅぅぅ！典時ぃぃぃぃぃ！

作間様は先程外出されました。それとノイン様に御伝言を御預りしてあります。『取り敢えず黙っとけ』以上です

典時も一緒にイジメるぅぅぅぅ！て言うか扱い日に日に日に酷くなる～

八話！ーー前編！だって世界は私の物だから（前書き）

ぴんぼんぱんぽ～ん

御早う御座います。1号です。今回は『低脳たる種族にでも分かる手作り料理（入門編）』を御送り致します
今回の御料理は焼きそばです。まず、御好みの具材（キャベツ・人参・ピーマン・もやし・イカ・海老等々）を御好みのサイズにカットします。人参等火の通りにくい物などは薄くするかよく炒めて下さい

「典時！イカが！イカが逃げた！ほら、真っ黒い体液吐き出してる」
「さっさと捕まえろ！つうか何だよ『海陸両用くらーケン』って！」
「作間く～ん。先生お腹が空きましたよ～」
「ならこれでも食ってろ金欠教師め」
「先生生ピーマン始めてですよぉ！でも行きますよ～」

後書きに続きます。それでは本編をどうぞ

八話！ーー前編！だって世界は私の物だから

「はらしょ～典時！エビバディプティ～？」
「等々脳内障害か末期に到達したか。近寄るな伝染する」
「ノイン様。簡潔に申しますが自害と鋼の粛清どちらが宜しいですか？」
「あれぇぇ！死亡フラグ確定！」

朝から喧しいものだ

制服に袖を通し朝食のトースターをかじりながら横目でノインを見る
相変わらずパンクした頭髪で珍しく朝から元気だ

「作間様。後２７分１８秒で学校に行かねばなりません」
「もうそんな時間か」
俺はコーヒーの最後の一口を飲み干しバック片手に家を出る
後ろでは１号さんとノインが見送っている。頼むから止めてくれ。
最近御近所さんから好奇の視線を送られているんだ
ほら、吉田さんの奥さん手を振ってるよ

「いっちご～さ～ん。今日のご飯な～に？」
「今日の朝食はピザトースト風ハムサンドとワカメスープ型タマゴ

スープです」
「いっただきま～す」
決して1号さんがふざけてる訳ではなく、ノインのご要望なのです
「はむはむ。おりょ、こにょおべぇんとょうなに（おりょ、このお弁当なに）？」
「そちらは作間様の御弁当です。御持参願ったのですが『校内で敵を作るわけにはいかない』との事で断られました」
「敵？学校って戦場なのかな？」
「私は此方の世界に来て日は浅いので詳しくは存じておりませんが勉学に励む場と聴いております」
「ふ～ん。じゃあ行こっか？典時の学校」
ノインの問いに1号さんはスカートの裾を摘まみ上げ一礼をする
「主に付き従うが侍女の務めと。ノイン嬢、御命令を」
「一個師団に相当する火器とお弁当持って突撃ィィィ！」
「仰せのままに」

ゾクッ

四時限目の授業中に極度の寒気に襲われ睡眠から醒める。今は社会か
「あぁぁ！作間君が起きたぁ！先生嬉しいですよ～」
「佐々木先生。生徒の前で両手あげてハシャぐのはどうかと思うぞ。恥を忘れたか？」

「寝起き一言目から毒舌ですかぁぁ！先生泣いちゃいますよ！」
しかしなんだ今の悪寒は。睡眠を妨げる程の悪寒なんて数年振りだぞ
「作間作間、先生マジで泣いてるぞ」
「教えてくれて助かるクラスメートＡ」
「僕は高枝だよ！」
「そうか、覚えておくよ高枝」
隅で本気で泣いてる佐々木先生を取り敢えず無視して外に視線を送る
願わくはば平穏を

「ノイン様。１１分２４秒程で目的地に到着致します。準備の程を宜しく御願い致します」
「よっしゃぁぁ！天下取るどぉぉぉぉぉ！」
「ノイン様。余りお弁当を乱暴に扱わないで頂けますか。中身が崩れてしまいます」
「刀をよ～～い！斬り込み始めぇぇぇぇ！」
歯止めの効かない嵐はすぐそこまで迫っていた

お昼休み１０分前。一般生徒は学食を得るために静かな殺気を放ち、教師は延々と教科書をそのまま読んで時間を潰している

時計の長針が天を目指し動くにつれて生徒は空気椅子状態で臨戦態勢をとり、弁当持参組は嵐に巻き込まれないよう机に密着している

「え～これにより古代ローマにおける文化の発展は・・・・・」

キーンコーンカーンコーーーーン

教室内の空気が変わる

「あ～、それでは本日はこれま――――」

『起立っ！礼っ！』

２０を越える戦士は礼９０。という究極姿勢

《ｕｌｔｉｍａｔｅ　ｆｏｒｍ》

終結の咆哮

《ｃｏｎｃｌｕｓｉｏｎ　ｏｆ　ｈｏｗｌ》を発動させる

教室に響くお礼の挨拶は既に周りの戦士に対する攻撃なのである

志乏しい輩が聴けば竦み上がって動けなくなる程の周波数なのだ

廊下側の人間（この席は必ず弁当持参組）は戸を勢い良く開け放ち、そこから飛び出す戦士

そしてその遥か後方を歩くのは作間典時である
彼はのんびり二階の窓を開けると雨避け用の小さな屋根を歩き渡り
廊下の屋根に飛び移る
既に食堂を確認した彼は悠然と歩を進める

「なぐごはいねぇぇぇぇぇぇぇぇかぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

屋根で硬直する男
ゆっくりと奇声の聞こえた方に視線を送ると黒煙が立ち上ぼり、定期的な破裂音と轟く爆発。それに重なる様に宙を舞う見知らぬ学生と教師

俺は何も見ていない
そう自分に言い聞かせ、大きな一歩を踏み出そうとする

「てぇぇぇんじぃぃぃぃ！何処いった～！お弁当持ってきたよ～」
屋根から飛び降り全力で校門に向かう
校舎の角を抜けるとそこには小さな戦場が広がっている
まさに戦争映画の終盤みたいに平地に固められたグランドの面影はなく、抉られた穴からは煙が漏れ、ボロ雑巾みたいになった人々は無惨な姿で転がっている。ちょっと歩くに邪魔だな
「さ、作・・間、これを・・・見ても毒舌か」
「おや？これは隣のクラスの逸樹（いつき）ではないか。何を遊んでるんだ」
「いや・・・・もういいや。アレお前の知り合いだろ・・・・・・止めてくれ」

そこには紅の炎に囲まれながら毅然と立ち、撃ち終えた銃（βーＳＰＥＴＳＮＡＺ※逸樹情報提供）を捨て、又々スカートの中からショットガン（ＴＡＣＴＩＣＡＬ　ＬＡＵＮＣＨＥＲ※以下略）のコッキングをスライドさせる鋼鉄の侍女
「何をしてるんだ？ここにアフガニスタンの惨状を再現するつもりか？」
１号さんは一礼すると更に手榴弾の安全ピンを軽く抜き校舎の準備室に投げ入れる
中で誰かが悲鳴を上げて飛び出してき、数秒後には色んな備品が飛び出した
「ノイン嬢の御命令です。『学校に着いたら制圧有るのみ！典時以外は敵よ！』との事で。先程武装した部隊が応戦してきましたので排除いたしました」
ああ、逸樹ってサバゲークラブにも入ってたな
「１号さん、俺とアホ精霊どっちが階級上？」
「作間様です」
即答ですか
「なら即刻破壊活動を終了。これより馬鹿の捜索を開始。見付け次第周囲を傷付けずに確保。但しアホ精霊には何をしても構わん」
「仰せのままに我が主。内に流れる血は主の要望に潤いを。鋼の四肢は主の要求に答えを」
二丁の拳銃（Ｍ９２Ｆ＋ＣＺ７５）を構え颯爽と校舎に向かう
今日の袖字は『少年よ、諦めを知るな』だった
『だが私は知っている』

逸樹は変な遺言を残して天に去っていった

学食で『これでアナタも明日から腹黒ワッサン』と『チャイルド練乳』を難とか購入し、漸く昼食にありつけた

下では小さな悲鳴が木霊し、破裂音（模擬弾）が連射している

グランドを見下ろすと見たこと無いゴツゴツした岩みたいなのがセッセと補修工事を始めている

「よう若造元気か。ん？後始末に来てやったぞ。ん？」

「・・・・・地位最上級民主最下層のイマか。アレはお前の部下か？」

「てめぇ久し振りの挨拶が毒舌ってどんなもんよ。ん？深く心傷付いたぞ。ん？」

ああうざってぇ・・

「で、その格好なんだ？スーツにネクタイ。どっちもかなりの値がすると思うが？」

「ああこれ？これはこっちの世界での仕事着。ん？いつもは代役使ってっけどたまには本人出ないとよ。ん？ほら、ロシアの国防って所のトップ」

は？ロシア？

俺はしばし考え答えに至る。遂に急性ノイン型痴呆症候群に感染したか。空気感染を超えた空間感染するようだ。実に恐ろしい。取り

敢えず感染しないためにも自我をしっかり持って対応しよう
「寄るな。今すぐ自分の世界に帰るがいい」
「お前本当に鬼だよ。スッゲー傷付いたなぁぁぁぁぁぁ！」
スーツ姿のイマが余りにも鬱陶しく泣くので校舎の屋上から蹴り落とした

どうせノインと同生物だ。死にはしないだろ

遥か下で何か凄い音がしたが気にするのはよそう

そうこうしてると昼の終了を告げる鐘がなる。急いで少ない昼食を押し込み校舎に戻る
流石に英語をサボる分けにはいかないからな。須藤先生は後処理が面倒で仕方ないし

廊下を疾走し、ギリギリで教室に飛び込む

そこにはカオス（混沌。原初にできた裂け目の意。ギリシア神話における原始混沌の神・ｋｅｉｏｓとされている。対はｃｏｓｍｏｓ）が広がっていた
先に謝辞だが先程の無駄な解説は忘れて結構だ。少しばかり状況が読めなくてな

「ノイン様～」
「ノインお嬢様～」
「お姫様～」
「おはほほほほ！私の天下よ～！」

教卓にふんぞり返るアホとひれ伏すドアホ
そしてアホの隣に首輪の紐を握る侍女。無論首輪はアホに繋がってある
1号さんは約束をちゃんと守ったようだ

もういいや。疲れた
「作間様。ノイン嬢の確保完了致しました。如何致しますか？」
「シメとけ」

八話！ーー前編！だって世界は私の物だから（後書き）

ぴんぽんぱんぽ～ん

如何でしたでしょうか？それでは皆様も試食です

「おかわり！」
「せ、先生もですよ！」
「おい、俺の食った奴出てこい」
「ち、ちがうも～ん」
「はわわわぁぁぁ。知りませんよ～」

それでは皆様、また次回御会い致しましょう。
御相手は、『一家に一体あれば便利、だけと私の主は一人だけ』の
精巧人形、１号が御送り致しました

※ＢＧＭは作間様の拳の快音

九話！ーー後編！だって貴方が好きだから！（前書き）

チャラッチャッチャッチャ～！チャララ～
チャチャチャッチャチャ～ラララル～

ハイそこで効果音！

びよよよ～ん

最高よ！そろそろ私のメインテーマ曲が見えてきたわ！
さあ！チャッチャと仕上げるのよ愚民！
いざ！天空の城へ！

九話！ーー後編！だって貴方が好きだから！

きーんこーんかーんこーん。きーんこーんかーんこーん

「典時！お～ひ～る～ご～は～ん～～～プリィィズ！」

「校庭の雑草でも食べてるがいい。どうなっても知らんがな」

後の掃除ロッカーの中でシクシクと態々声に出して泣くノインを無視する事にしよう

「作間様。御弁当を御持ち致しました」

「あぁ。やっぱり持ってきたか。ま、いいか」

二重箱を広げると実に手の込んだ昼食が並んでいる。いったい何時から作ったんだ

「下ごしらえをふまえ４時より調理を始めました」

「ご苦労さん。アホの世話もしてもらってホント助かるな」

「恐縮です」

恭しく一礼する一号さんは掃除ロッカーでまだ泣くノインを引っ張り出し、エプロン取り出し広げたランチシートにノインを座らせお弁当と水筒のお茶を差し出す

「作間様の御弁当より内容量は劣りますが手は抜いておりません」

「いじぃごぉ～～ざぁ～ん！ありがどぉぉぉぉ！」

周りの男子は惜しみ無い拍手と自分の弁当のオカズをどんどん献上していく。やめろ、調子に乗るから

「典時！今私って頂点？超頂点！」

「イマと同じだな」

「うわスッゴい腹だだしい！言葉の暴力は心抉るんだよ！」

「失礼ですがノイン様の心はそれ程繊細なのですか？」

ノインは泣きながら卵焼きを口に放り込んだ

ほのかにしょっぱかったそうだ

結局最後まで居座った阿呆とロボは学校の人気者になり、早々とラブレターを手渡して撃沈していった。それでもノインは同封されたチョコはしっかり食べていた
まて、その汚れた口を拭きに此方に来るな。一号さん、今こそ貴女の出番なんですよ

なに、調理室で実習の手伝いだと？

グシグシグシ
「このチョコ安物かな。マダマダだね」
「ノイン、お前には今から指令を命じる」
「は！何でありましょうか典時元帥！」
「母親に中指立てて『ファック！』ってやってこい」
「元帥！神風特攻は嫌でありますホント勘弁してください！」
「だが断る」

テレフォン

「作間様只今戻りました。作間様の御友人と言い張る方から作間様の指示との事で調理実習の助力して来ました」
「そうか。取り敢えずその御友人とやら一発殴っとけ」
「畏まりました」

「先生！逸樹の奴が頭からトマトの汁流してます！」
「ほっとけ」

地集界

「緊急オペの手配を」
「イマ様の容態が急変致しました。早く血液の準備、及び擬骨の製造を」
「脈拍７０まで下がりました。電気マッサージを」
「地上で何が起きたのでしょうか。イマ様がここまで酷い御怪我なさるとは」
「０００１に後で連絡をしてみましょう」

割りと大変だった

「作間様。今晩の御夕飯は何に致しましょう」
「魚でも買うか。ノインってこいつ使い物にならないんだっけか」
1号さんの肩には黒焦げ痙攣アホ精霊がいる
「さ・・・・さかな、グッジョブ」
まさに根性と習慣の賜物だ。その心に免じて少し贅沢するか

その夜ノインは盛大に食し、典時に猛烈感謝の印と言い張り風呂にまで突撃して背中を流すと言ってきた。無論目にシャンプーを注いでやった。ざまあみろ
「作間様。御背中を流しに来ました」
「あんたもか！」
どうやらロボにも急性ノイン型痴呆症候群が効くらしい
悲しいものだ

「イヤダァァァ！高いところイヤダァァァ！」

地集界では位最高人権最下層の男が突然叫びだし、手術後の縫い傷がパックリいって部屋が真っ赤になったのは細やかな余談である

九話！ーー後編！だって貴方が好きだから！（後書き）

ジャジャジャン！
ジャージャジャジャン！
ジャージャジャジャン！
ジャージャン！
ジャララララ～

ハイそこで効果音！

ぺい～ん

いいのよこのアクセンつッ！たまらないビート！

世界が見えてきたわ！
ん？どしたの典時、１号さんにフライパン持たせて
ねえ１号さん、なんでそんな悲しい者を見るよう瞳を向けるの？え？ちょっと、ちょっとスタップ１号さん・・・・・・・・・

ヒョオオオオオ！

十話！――もう手遅れな人と超サディストな人（前書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃ～！たらららら～、たたたらら～！たたっ！

あけでとうございます！　世界の君主。ツェッペリ～ノ・アルエル・ノイン様よ！

明けましておめでとう御座います。地集界産０００１号。作間様に一号と命名されました。以後御見知りおき下さい

最上段が新年早々失礼かましました。明けましておめでとうございます。今後もアホが世界を壊さないよう厳重に保管又は放棄します。苦情は一切受け付けません
今年も一年宜しくお願いします

十話！――もう手遅れな人と超サディストな人

ぶ～んぶんぶんぶんぶ～ん。ぶ～んぶんぶんぶんぶ～ん

いつの間にかマナーモードが蝉の鳴き声にされた携帯を開く。おや？珍しい。利下からメールか

『おひさ～。あ～そぼ』

・・・・・・・

隣にはノインと一号さん。なんだその期待に満ちた目は。駄目だぞ。連れていかんぞ

「典時お願いにゃ～」

「没だ却下だ即寝ろ」

「典時、日に日に私の扱い本当に酷くなったよね？酷くなったよね！」

「ノイン様、被害妄想は程々にされた方が宜しいですよ」

まったくその通りだな

「一号さんなんでいっつも典時優先なの！」

「階級の違いです」

即答されテーブルの下に入り泣き始めたノインを無視して返事を返そうとするともう一件急に届いた

『ノインちゃんもよろしく～ｂｙ利下ちゃん』

うえぇ

快音で路面を滑るバイクは警察とか白バイがいないことをいい事に法規速度＋５０ｋｍで爆走している

サイドカーは無理矢理着けたため何時金具が外れてもおかしくない状況である

「そんでなんでアタシがコッチなわけぇぇぇ！」
「俺には何も聞こえん」
「右に同じです」
「一号さん！普通侍女ならコッチでしょ！主人の命を体張って守りましょぉぉぉぉ！」
「ノイン様、『仕方ない』と言う言葉を御存知ですか？」
「話し噛み合ってない上に言い訳ですらないよね！」
「気のせいです」
「右に同じだ」

泣きわめくノインを連れ爆走するバイクは高見沢邸２００ｍ手前でサイドカーが崩壊したのは余談だ

「わぁいらっしゃ～い」
相変わらずただっぴろい屋敷に似つかわしくない質素な部屋だ。畳

や木材独特の匂いに迎えられ、利下の向に腰を落とす
「ん？これから夏が始まるのに囲炉裏を増やしたのか」
「うん。でもいっそのこと日本家屋建てようかなって思ってるんだ～」
「お前の自由だ。好きに建てればいいだろ」
「う～ん。てんちゃんも一緒に住もうか？」
「遠慮する」
「えぇ～～」
つうかてんちゃんいい加減やめれ
そんな俺の悲痛な叫びには目もくれず、さっさと茶の用意を始める利下は漸く一号さんに気付いた
「・・・・・愛人？」
「待て、どの経路を辿ってその答えに至った」
「えっと、後ろの人→女の人→大人な女性→メイド→ノインちゃん不在→愛人かな」
「メイドから一気に飛躍したな。ついでに愛人でも何でもないただの居候だ」
すると一号さんは隣に正座し丁寧にお辞儀をする
「只今御紹介預かりました一号と申します。作間様の御厚意により御自宅にて居候させて頂いております。以後御見知りおきを」
「此方こそ。私は高見沢利下。てんちゃんとは小さい頃から一緒に遊んでるんです。これからもよろしくお願いしますイチちゃん」
あ～あ。また変なあだ名増えたよ

とまそんなわけでのんびりしてると漸く不在だったノインが到着した。どうした？そんな泣きじゃくって
「酷くね！時速１２０オーバーから振り落としておいて助けにすら来ないって！」
案ずるなたわけ。何故か無傷じゃないか

「何故か！典時そろそろ私ぐれちゃうよ！？」
やってみろ
「へっ、世の中お先真っ暗だ、ふんだふんだふ～んだ！」
あぁ。やはりあの子は脳が末期なんだな
近付くな
「うわぁぁぁぁん。きくさげ～典時が虐める～」
「よしよしノインちゃん。てんちゃんだって虐めるのにもわけがあるんだよ？」
「ひっく・・わけ？」
ほう、何だ？
「調教♪」
ウォイ！
「きゃっ、典時ったら・・・・・ぽっ」

暴れようか？今この場で暴れ散らそうか？
「作間様。ここは抑えられては。後友人宅でその様な行為は侍女として賛同しかねます」

むう、熱くなり過ぎたか。よし、冷静になろう
「一号さん。今すぐアホを突き落として」
「仰せのままに」
「ウソォォォォォォ！」

静かになったな

相変わらずニコニコ笑う利下は何故か具体的な日本家屋製造計画を立て、何故か主力メンバーに俺他愉快な仲間が加わった

「なまえは～・・・・・・典庵？」
何処の店だ！結局屋敷名は『典庵』で受理され明日から工事に取り

掛かるらしい
晩飯を誘われたが流石に今回は断り帰路に着く

バイクを路上に止めずっと待つ。すると屋敷の方からトポトポ歩いてくるアホ精霊
「あ・・・典庵」
「典時だバカタレ」
このバイクは二人乗り。後ろには既に一号さんが座っている
「ふんだふんだふ～んだ！いいもん歩いて帰るもん！」
「・・・さっさと乗れ」
俺の前に空く隙間を叩く
「・・・・でぇんじぃぃぃぃ！アイラブユ～」
猿の赤子の様に腹に抱き着くノインといつもの様に冷静沈着な一号さんを乗せバイクは疾走した

十話！――もう手遅れな人と超サディストな人（後書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃ～！たらららら～！たたっ！

典時～、御神籤引いたよ～！超大吉！

作間様、新年早々大吉は今後の運気を低下させるのでは？

いや、あいつの存在が既に俺等を凶にする。迷惑この上ない

てんちゃ～ん！大吉三枚引いた～。わ～い♪

そうか。よかったな

棒読みなのは何で？

つか典時新年早々相変わらず酷いよね！

気のせいだ

気のせいです

気のせいだよ～

十一話！ーー美味しい貴方は何時までもＬＯＶＥ！（前書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃ～。ちゃららら♪

ひっさびさにＮＮＮ！

今日の御便りは東京都千代田区にお住まいの佐藤さんからの質問です

『ブァファリンの半分は優しさだけど残りの半分は何ですか？』

知るか！科学成分だろ！それとも憎しみ？悲しみ？それとも典時に対する私の気持ち？

いやぁぁぁん！もういやぁぁぁん！！

十一話！ーー美味しい貴方は何時までもＬＯＶＥ！

「第一回、典庵杯争奪。『フードゲットｉｎ典庵』を開催致します。実況は私、一号と」
「高見沢家に御仕えして４２年、執事長の紅蛇（くだ）が御伝え致します」
「宜しく御願いします」
「此方こそ宜しく御願いします。今日は晴天に恵まれ絶好の競技日和ですね」
「はい。気温３５ 。、湿度７５％、風速０．５ｍ。素晴らしいコンディションです。只今午前１０時２３分。気温はまだ上がります」
「そうですね。今回はさしてハードルが高いとは思えないため救護班は特別休暇で熱海に三泊四日の温泉旅行に行って頂きました」
「それではこれより選手の御紹介に移らせて頂きます」

いちばんこーす
作間典時・・パワー、スピード、冷静さ。全てにおいて上位に立つ最有力候補です
「何故こんな企画に参加せにゃならん。帰るぞ」
なお、愛車の鍵はゴール地点に保管されております。御了承下さい

にばんこ～す
高見沢利下・・身体的ステータスが不明のダークホース。その心の内を知る者は無し
「やほ～。がんばっちゃいま～す♪」
なお、作間様の鍵を提供して頂きました。誠にありがとうございます

さんばんこ～す

ノイン・・言わずと知れた精霊様。突発的行動が吉と出るか凶とでるか
「爆・食・万・歳！私の前に在るもの全て食！」
なお、負けた場合パラノア様より制裁が御座います。拒否権はありません

よんばんこ～す
逸樹～～以下時間の都合により省略させて頂きます。御了承下さい
「酷くね！俺竜矢です！今後も沢山でま・・・」
逸樹様は有料参加ですので後に請求書が郵送されます。拒否権は無いです

「それでは此よりルール説明です。紅蛇様宜しく御願い致します」
「畏まりました。まず、今回のステージである『典庵』は利下様の御要望により、多数の部屋と多彩な仕掛け、屋根裏や地下を完備し、豊富な数の罠が散りばめられております。致死量では御座いませんのでご安心下さい。鎧武者の皆さんスタンバイお願いします」
「それでは皆様。所定位置に御着き下さい。ノイン様、作間様から御離れ下さい。ノイン様は玄関からです」
「ちょっ！ちょっとルール説明してなくね！」
「五月蝿いです逸樹様」
ポチ
「あぁぁぁ・・・」
「逸樹様は地下１３階、心霊コーナーからスタートです。御安心下さい紅蛇様は霊媒師と退魔師の資格を御持ちです。一緒に消えても御了承下さい」

この番組は高見沢グループと、東方不敗の名の下に御送り致します

・・・・・・・

何故こんな事をしなきゃいけなくなったんだ

周囲はコンクリートで固められ、ひんやりした空気が辺りを包んでいる

先程見付けたメモをもう一度読み直す

『ルール。各場所に隠された食材や引換券を数多く持つ者の勝利。居間の中央にある囲炉裏に座った時点で競技終了とし、以後、全員の帰還までその場で待機。一度着席した場合、競技再会は不可とし、他者から奪う行為は特定の部屋で呑み可能とする』

早く終わらせよ

早速上を目指し階段を探す。途中現れる特殊メイク隊に軽く挨拶しながら歩く。まあ大体の人は顔見知りだし

すると一人の落武者が手招きをしている。そちらに向かうとなんとも年期の入った上り階段が現れる

「いつもお嬢様がお世話になってます」

落武者鎧武者に頭を下げられるなんて今後無い体験だな

「ああこれ引換券です。どうぞお持ちください」

「態々すいません大倉さん。頂きます」

ガチャガチャと手を振る皆さんに見送られ次の階へと進んだ

「セイヤァァァ！」
バコォォォン！
「チョイヤァァァ！」
チュドォォォン
「苺ゲットォォォ！」
一粒って少なっ！
すかさず口に放り込みモクモクモク
「うんまぁ～」
流石キクサゲ！食材は超一級品よ！でも少なっ！

こんな壁なんてプリティーノインに掛かればイチコロよ！セイヤっ！

「・・・うそ～。今の避けただろ。ちぇっ」
そこには暗い部屋で半袖短パンの男がトマトジュースを飲みながら
懐かしのファミコンで遊んでいた。２Ｐで声の拡張が出来るアレだ
ピロピロリっポッピ
「またかよ～。絶対避けたって～」

ノインは静かに倒した襖を直した
「・・・・ガンバろ。うん・・・・ガンバろ私」
・・・あ、ハム見付けた・・・・・輪切りが一枚・・泣いちゃ駄目だよね

「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
つか何この悪霊！見える！俺霊感無いのに見えるよ！

「あァあアガァアカぁ」
「ギャァァァァ！」
滅して！誰かこの変な霧に包まれた半腐りの骸を浄化してぇぇ！

※モンスターが現れた
悪霊ＡＢＣＤＥＦ

「多！無駄に増えた！」

逸樹は集魔の笛を使った
「えぇ！俺そんな相手も持ってねーぞ！」
モンスターが現れた
腐った変死体ＡＢＣＤＥが現れた

「まぁぁぁぁぁぁぁ！」
逸樹は迷宮の奥深くに走り去った

「皆様快調か滑り出しですね」
「その様ですね。それにしてもお嬢様はいつあんな仕掛けを造ったのでしょうか」
「実質被害を被るのは逸樹様だけですので宜しいのではないでしょうか」
「そうですね。おや、ノイン嬢が地下闘技場に到着したようですよ」

「いやあぁァぁアぁぁ」
「もうノインちゃんったらママの顔見て急に叫ぶなんて。ママショック」
「ママママ！何でここにいるの！」
「あら。高見沢さんからご招待してもらったのよ。パーティーだって」
「えぇぇ！キクサゲ何で天界の連絡網知ってんの！私も知らないのに！」
「（ぱくぱくぱく）」
「実の娘に口パクで無能ってママまで本当に酷くなったよね！」

「最近のインターネットは凄いのよ」
「無視したァぁぁ」

※闘技場外周から中心に向いて３６０°撮影。そこから頭上にカメラが周り、回転しながら地面スレスレの急降下。そして画面が二つに割れ両者の顔が映る

『暴風児ノインＶＳ天風鬼神パラノア』（草書体でロゴが飛び出す）

さあいよいよ始まりました地上最高の親子喧嘩。ノイン嬢ＶＳパラノア婦人。実況兼解説は高見沢邸放送部部長、吉田孝路がお伝えします

「勝負よノインちゃん！私に勝ってみなさい！」
「無理絶対！ママってパパより強いじゃん！」
「勝った商品はステーキ７００ｇよ！」
「先手必勝超空気砲！」

おおっとノイン嬢不意討ちで強力空気砲だぁ！
直撃だ！此はダメージ有りかぁ！？
「んふふ。未々甘いわよノインちゃん」

無傷だぁぁ！軽く突き出すその手で全て受けきった様です。流石親子。特性は熟知してますね
「これが空気砲よ！」
「わぁぁぁぁぁ！」

見えません！全く見えませんがノイン嬢が逃げる後を通過する空気砲は壁を見事に粉々にしてます！当たれば死亡フラグ確定だぁ！
「まだまだ行くわよ～！『雷帝壱ノ太刀』」
おおっと！パラノア婦人の腕から電撃ブレードが現れたぁ！
「手加減してるから安心しなさい♪」
「出来るわけないじゃん！大人気ないよママ！」

おや？ノイン嬢、辺りをきょろきょろ眺めているぞ・・・・と、逃亡か？出口に全力ダッシュしてるぞ！
「てぇぇぇんじぃぃぃ！会いたかったよぉぉ！」
おお！作間殿見事なカウンターアイアンクロー。ノイン嬢完全に脱力状態です

『暴君作間&暴風神ノインVS天風鬼神パラノア』※再びロゴが飛び出す

「おい、いつから俺も参戦する事になったんだ」

流れに任せてます。勘弁してください
「テンちゃーん。いい機会だから勝負だ！」
「パラノアさん。人間ごときが勝てると思うんですか？」
「心配ないわよ。私手加減するしノインちゃんとくっつけば同じ力が使えるのよ」
「つまり～・・・・ちょいやっさぁ！」

おお、ノイン嬢作間殿の背中にしがみ付いた。いいですね～。兄弟を思わせるようだ

「不愉快だ解説者」
パリーン

※カメラ破損につき、作間典時の語りに移ります

つかメンドイな。ノイン投げて上行くかな

「貴方と私は一心同体！いつまでも離れないもん！それが愛なのよ！」

うぜぇ

「それじゃあいくよ～」
いきなりかよ！咄嗟にノインを盾にしながら後方に飛び退く
「のっけから暴君発動！酷くね？ママも眼がマジだよ！」
両者聞く気無しだ。つかパラノアさん踏み込みが速い。ノイン壁もあんま持たねーな
「持ってたまるかぁ！」
「うるせえ！さっさとお前の力出せ！俺もやべーんだよ！」
「アイアイサー！オーバーソウルINプリティーノインちゃん！」

背中にノインを付け直し、迫る刃を咄嗟に掴む。手の周りを空気が渦巻くのが分かる
「ぶっちゃけ10分しか出来ないからね！まだ幼い私には貴方の全てを受け止めれるほど大人じゃないから」
「ノイン式玉砕砲発射ぁぁぁ！！」
「うそぉぉぉぉ！！」

大気を渦巻くノイン砲は見事にパラノアさんを通過し壁に激突した

「仕切り直しよテンちゃん！これから本番よ！」
「俺は平和主義だ。殺るなら娘と闘え」
「そんな娘復活！」
『・・・・っち』
「うわあぁぁあぁぁん」

「つか助けてぇぇぇ！」
逸樹は逃げていた
「登場少なっ！」

「お嬢様。お茶が入りました。一号様も如何ですか？」
「謹んで御辞退させて頂きます。私は機械人形故食事は出来ません」

「これは失礼しました」
「あはは。イチちゃん人間そっくりだもんね～」
放送部の吉田です。何故か参加者であるお嬢様は庭にセットされている放送席の隣でゆったり寛ぎながら玄米茶を飲んでいらっしゃいます。こら三崎、サボるんじゃねぇ
「か～じ～君もお茶飲も～よ。ミツ君も疲れたでしょ～」
『紅蛇先輩ご判断を！』
「・・・・・お嬢様が宜しければ」
『いやっほぉぉ！！』
無礼講万歳だぜ！
お前等アイスは数少ねーから先輩に回しとけ！群がるなアホ！俺たちゃアイスコーヒーだ！
つうわけで後の解説作間殿宜しく！

「・・・・・・」
「テンちゃんなんか眼がマジになったね」
「何かイラッとした」
つかノイン。さっさと戻ってこい。お前のせいで上に行けねーんだよ
「てゆうかママ。何で典時と闘うの？」
「だって可愛い愛娘を護れないのに旦那さんになられたら嫌なんだもん」
おいこらそこのバカ娘の母親。いや馬鹿母

「典時は私の事ゾッコンＬＯＶＥよ！そして二人揃えばラブラブ石破天狂拳よ！」
デスクロー＆アルゼンチンバックブリーカー。そこからバックドロップ
「おいノイン。少し口チャックしておけ」
「あ、あいあいー」
「それがテンちゃんの愛情表現か～。後でパパにやってあげよ♪」
殺るの間違いだろ

「うわあぁぁあぁん」
逸樹は逃げていた
「短っ！しかも前回と同じかよ！酷くね！？」
魑魅魍魎ＡＢＤが現れた
白骨死体ＡＢが現れた
白骨死体ＡＢは砕けた
「鬼ぃぃ！悪魔ぁぁ！」
逸樹は逃げ出した

回り込まれた！
「あぁぁあぁぁ！！」
憑依された
「あぁぁアぁアアぁ」

くそっ、踏み込めん。相手が相手だから仕方無いが・・・・
「くぉらぁノイン！前にしがみ付くんじゃねぇ！動き辛いんだよ！」
「びぇぇ！ゴメンしゃあい！盾にしないでぇ！」
漸く後に這い回ったか
一息吐く間も無く下から空気の渦が突き上げて来る。咄嗟に相殺させ距離を取る。ノインのお陰でかなりの距離を稼げた
「テンちゃん、まだ本気ださないの？」
「出しませんよこればっかは。師匠にも止められてるんですよ」
「え～つまんないな～。ねぇ一回だけいいでしょ？ねぇーねぇーねぇ～」
おい、幼児化した母親どうにかしろ。同族だろ
「無理だよ。あんなになったママ止めたこと無いもん。もう諦めてやるしかないよ」

「テンちゃんテンちゃんしょーぶしょーぶ♪」
いくつだよこの駄目親
「え～っと３３歳だったかな？詳しく教えていくれないから」
若っ！俺の母親より若いぞ。いいのか祖母。こんな速い結婚と出産を

ぴんぽんぱんぽ～ん

『競技に励む皆様方。まもなく競技終了の時刻になります。此より戦闘を一時中断し、御早めに囲炉裏の間に御集まり下さい。地下空間の封鎖に取り掛かります』

「・・・・・・っち」
「パラノアさん。上行きますよ」
「む～。分かった」
ご機嫌斜めの駄目親子を引き連れ上の階へと急いだ。途中弓や槍や落武者やドッペルゲンガーや悪霊の逸樹等を撃退し、寸での所で地下より脱出した

『御疲れ様でした。これより地下空間の封鎖を開始致します。所定の位置より内側に身を乗り出さないよう御協力御願い申し上げます』

地響きと共に３０ｃｍはゆうにある厚さの隔壁がゆっくり動き出す。下では悪霊達が蠢き宛ら地獄絵図の様だ
隔壁が閉じ、何重にもロックが施され、完全に地下通路の入り口は閉鎖された
「みんなお疲れ～」
囲炉裏の間で手を振る利下と利下が集めたのであろう食材を整頓している料理班
俺は落武者組の人から貰った引換券を渡し腰を卸す。止めろ馬鹿親子。引っ張るな、引っ付くな
片方を瞬発的に黙らせもう片方に玩具として進呈する。５分持てば

いい方か。何だ喧しいぞ。大人しくそこで親と戯れていろ。俺は知らんがな
「御疲れ様でした作間様。御無事で何よりです」
「おう。つうか鍵返して。馬鹿が手を出す前に」
素早く鍵を取り出した一号さんは何故か俺の顔をまじまじと見る。
何だ、顔になんか付いてるか
「申し訳御座いません。此方をどうぞ」
鍵を渡した一号さんはそそくさと料理班の中へと消えていった
何だったんだ？

それから集まった食材でどんちゃん騒ぎが始まった。元々利下は此処で働く連中を雇うというより一緒に暮らすと考えてるからいつも一緒に騒ぎまくっている。主従関係は強くない分信頼みたいなのは何処よりも強いんだろうな
俺はコソコソするノインの頭を鷲掴みにして上下にシェイクシェイク

「あっ！秘蔵のアイテムが！何すんのさ典時！」
「ガキが酒なんざ飲むな。大人しくトマトオレ（薄味）でも飲んでろ」
「ノイン様。パラノア様が御呼びです」
「の～いんちゃ～ん。このむのう♪」
「うわぁぁぁぁぁん。典時、てんじぃぃぃ」
「ノインちゃん可愛いな～。よ～しみんなバンバン飲も～」
『イエッサーお嬢様！ヒャホォォォイ！』

本当毎度毎度歪んでるよ

とある一号さんの毎日の記録。第２２

高見沢様より作間様の幼少時代の記録を拝見させて頂いた。幼少期の作間様は現在と比べ大変御静かな方だと推測される。とても貴重と判断し、メモリー最高機密で永久保管を実行する

「♪～♪♪～」

鼻唄混じりにキーボードの音がリズミカルに重なり、画面には作間典時の戦闘シーンが貼り付けられた

「んふふ～。テンちゃんダイアリーにまた新たな一ページ♪さぁどんどん増やすぞ～」

地下秘蔵部屋は完全なる盗撮＆罠操作部屋だった

後日
学校に行くと逸樹がいた。皆と挨拶を交わし席に座る。俺に気付くと爽やかに手を振ってきた
あの日逸樹を見ていないが目の前の逸樹は眼が何処か濁っている

アレが本物なのか第2の逸樹なのか。俺に知る術は無く、俺は自分の教室へと歩を進めた

十一話！ーー美味しい貴方は何時までもＬＯＶＥ！（後書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃ～。ちゃらららいやぁぁぁん！もういやぁぁぁん！！

ノイン様が行動不能の為、私一号が引き続き御送り致します

神奈川県厚木市、大川様からの御便りです

『一号さんの他に何人ぐらい仲間がいるんですか？』

私０００１はプロトタイプ。そして私のプログラムを基礎に０１号から７２号まで製造されております。我々精巧人形はイマ様の身の回りの御世話や派遣、暴動の鎮圧等様々な分野に対応出来る様設計されました。そして今現在作間様の御自宅にて御世話になっております

いやぁぁぁん！もういやぁぁぁん

それでは皆様。良い一日を。次回のＮＮＮは私が御送り致します

十二話！ーー駄目な貴女にこんにちは（前書き）

ぴんぽんぱんぽ～ん

御無沙汰しております。1号です
前回同様酷く醜い醜態をさらけ出したノイン様に代わり御送り致します

只今世間で問題になっております北京オリンピック。作間様の一言は『中途半端だろうな』だそうです。私の最近の問題は日に日にノイン様の奇行に拍子を掛ける先生たる方が頻繁に作間様を訪ねていらっしゃることです

ノイン様と同じ対応で宜しいのでしょうか

十二話！ーー駄目な貴女にこんにちは

にちようび

・・・・・ぐぎゅるるる～。きゅるるぅぅぅ

お腹空きましたよぉぉ

冷蔵庫・・・・

「そう言えば冷蔵庫持ってないですよぉ」

泣いてもお腹は一杯にならないし冷蔵庫は空から落ちてきませんからねぇ

布団からもぞもぞ這い出て先ずは朝のご挨拶

「ちゅー太郎おはよう～。三日ぶりだね～」

台所に視線を向けると一匹のネズミがチューと鳴いていた

「ご飯はありませんよ～。隣の西さんの所へ行ってくださいね～」

ちゅー太郎は再度チューと鳴き隅の方へ姿を消した

さてさて～。お腹空きましたよぉぉ。でも今あるのは自家栽培のもやし君だけですからね～。ほぼ水分の植物食べても満たされませんからやめておきましょう

こんな時は可愛い教え子に助けてもらいましょう。でんわでんわ～

・・・・・・・

あれぇぇ？作間君電話出ませんね～。もうこんな時間なのに寝てる

なんてだらしないですよぉ
ここは突撃今日のご飯ですよ。一日の食生活を調査です。生徒の食生活まで把握するなんて教師の鏡ですね～

いざ行かん。作間君のお家
太陽が気持ちいい程輝いて皆光合成してますね～

佐々木先生在住アパート〔ヒラルダ〕
住民の方にアンケートを取り、管理人の『だってカッコイイじゃん』の一言で決ったアパート名。無論佐々木先生命名

周囲一帯を動植物に占拠され、伸び伸び育つ雑草から食虫植物はたまた食人植物。動物にに至っては独自の進化を遂げたとの噂も出回っている

今では数少ない住民の佐々木先生。そして唯一動植物と共存を成功させた奇跡の偉人である
「みなさ～ん。先生行ってきますよ～」
キギャァーやブゴォォ等遊園地はおろか南米の熱帯地方でも聞けない様な怪鳥や大型猛獣の雄叫びが響き渡る

さあさあ先ずは大きな道路に出ますか。陽気に鼻歌フンフン♪

「やあさっちゃんおはよぉ。今日も相変わらずだね～」
「やほ～。今日も沢山割引してね～」
八百屋さんに見送られフンフンフン♪

さあさあ割とご近所さんの作間君のお家到着ですよ～では早速
「あちょちょちょちょちょちょちょちょちょちょ！」
ピピピピピピピピピンポーン！連射ですよぉ～
・・・・・あれぇ？居ませんねぇ。まだ寝てるんですか？
押しても引いても開かない扉を少し引っ掻き諦めました。寝てる作間君を起こすと怒られますからね～
渋々帰路に着き交差点を曲がった辺りで大変重要な事に気付きました
・・・・・・・あれぇ、鍵がありませんよぉぉ。先生ちゃんとポケットに入れたのに

「・・・・・・穴あいてますぅぅ」
先生ニアミスですよぉ！
まあ三ヶ月も前から穴を放ってた私もあれなんですけどねぇ
ここは一つ来た道を戻りながら探してみましょう

「あれぇ、ここドコですかぁ？先生迷っちゃいましたよぉ」

見たことない場所ですねぇ。確か坂下さんの塀の下を潜って来たと思ったんですけどねぇ
「にゃぁ～～」
塀の上で三毛猫が鳴いている。何かバカにされてますねぇ
「猫！先生を馬鹿にしたらいけませんよぉ！」
「ニャふ」
んあぁ！物凄いバカにされてますよぉ！もう許しません！その肉球モミモミしてやる

追いかけっこが始まって２０分・・・・言わなくても分かりますよねぇ
「まよっちゃいました」
もうここは何処の樹海ですか！先生こんな場所知りませんよぉ。電波無いって何処なんですかここは。一応私都会に居るんですよ
「さ～く～ま～く～ん。先生助けてくださ～い。電波っ子でもいいですよぉ～」
アホ～　アホ～　アホ～

カラスにもバカにされてますか？先生泣いちゃいますよ
日曜日だからちょっと冒険しただけなのにぁ
よたよたさ迷うこと・・・・・・もう時間も分かりませんよ！
ああ！遂に太陽の光を身体中に浴びせることが出来ました！電波も三本！助けて作間君！！

「もしもぉし！作間君ですかぁ！」
『確認もしないで電話をするな駄目教師。なんだこんな夕時に』
「先生のＳＯＳに毒舌返しですか！それより助けてください。先生迷子になっちゃいました」
『幾つになった駄目教師。俺の記憶ではとうの昔に２０過ぎたと記憶するが？そしてその携帯にはＧＰＳ機能が有るのを三日前に教えた筈だ』
「先生まだ２３ですよぉ！でもじーぴーえす？機能を教えてくれてありがとうございます」
えっと確かワンタッチで出来るんですよね

『それから駄目教師』
「なんですか？」
『遂に自分を駄目教師と認めたか』
「ひどいですよぉ！」
『まあいい。駄目教師、今日は何曜日だ？』

「日曜日ですが？」
『・・・今日は木曜だ』

あれぇ？

『減給だな』

あれぇ？

十二話！ーー駄目な貴女にこんにちは（後書き）

ぴんぽんぱんぽ～ん

先程の放送に一部、訂正が御座いました
作間様から頂いた情報によりますと、『先生』ではなく『駄目教師』
『給料泥棒』『無能』の間違いでした。深く御詫び申し上げます

「ひどいですよぉぉ！って・・・え？誰ですかぁ！？この黒い人達
誰ですかぁ！わぁぁぁ、ひっぱられ・・・・・」

電波障害による、雑音等が流れてしまいました。深く御詫び申し上
げます

十三話！ーいちごうさんのいちにち（前書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃー

この番組は、ＮＰ●団体と、東方不敗の名の元に御贈りしております

今晩は。ニュースの御時間です。
昨夜未明、ＦＡ－ＭＡＳ５．５６Ｆ１及びＳＴＥＹＲ　Ｍ－ＧＢ、Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　Ｇ３　ＳＡＳで武装した男性二名を確保。
首謀者と思われます逸樹竜也様（１７才）は書類送検され、後日作間独裁法により刑が執行されます

次のニュースです
来週の火曜、高見沢利下様スポンサーによる『典庵』がオープンする事になりました。オープンするに当たり、先着５０名様まで、オリジナルデザート若しくは抱き枕のいんちゃん。サンドバックいつきの何れかを御選びする事が出来るそうです。皆様是非御来店下さい

それではＣＭです

十三話！ーーいちごうさんのいちにち

ノイン様は非常に機嫌が良いと判断致します

作間様は非常に機嫌が良いと判断致します

「てぇんじぃ～。今日のご飯はなにかな～？私的にコロッケプリーズ♪」

「ほう、奇遇だな。今日はコロッケだ」

「いやっほぉぉぉぉ♪」

ノイン様は跳び跳ねながらイソイソと食器の準備を始め、作間様は大変珍しく鼻歌を奏でながら馴れた手付きで調理を始めています

「おいノイン、ちょっと手伝え」

「イエッサァー！ひさしぶりの手伝いにゃぁ！」

台所に走り去るノイン様を見つめ、私一号は視線をずらし外の景色を眺める

私一号は、御休暇を頂きました。暇です

ノイン様は相変わらず異常な速さでコロッケを消費し、作間様は時折鳴り出す携帯を操作しながらゆっくりと食事を進めています

「一号さんお休みの日何してたの？何処か行ったの？」

「はい。午後より少々商店街に用事が御座いまして。その後一度地

集界に戻っておりました」

イマ様への御報告と装備一式のチューニング等済ませて帰る予定でしたが１９・２１・３７・２５・４１号に作間様やノイン様の事について色々聞かれ、イマ様に対する処遇について意見交換をしておりました。やはり磔が妥当でしょうか

「そうだ一号さん、私明日から少し天界に帰るから。パパが呼んでるんだ」

「いっそそのまま帰ってもいいぞ」

「てぇんじぃぃぃぃ！」

ノイン様は猫科動物の如く飛び掛かりますがいつもの様に返り討ちにされております。進歩されませんね

「一号さん今スッゴイ失礼な事考えたでしょ！」

「記憶に御座いません」

ノイン様、御食事中は余り騒がれない様御配慮下さい

いつもの様に発砲音が木霊しました

翌日早々と天界に向けて出発なされたノイン様を御送りし、作間様はいつもより幾分早く登校なされました

私は念入りに掃除を済ませ、戸締りの確認、火元の確認

全てオールグリーンと判断致します

素早く部屋を後にし、駐輪場に向かいます。途中御隣さんに色々と質問されましたが私のメモリーには登録されていない単語が多く返答に大変苦労致しました。こすぷれと御奉仕ぷれいとは何でしょうか？
その後駐輪場の隅、普通の方には視認されないよう施された結界で守られたマンホールへと向かい、蓋を外します
それでは地集界へと向かいたいと思います

皆様は地集界と聞いてどの様な場所を思い浮かべますか？
ノイン様の様に超近代ビルと煌めく人工太陽、タイヤの無い車等を思い浮かべていらしたのなら今すぐ忘れることを進言致します。ノイン様の様になりたいのですか？

私が降り立ちましたのが地集界、ギンヌンガの淵と呼ばれる異界との唯一の入り口です

此方の地集界と作間様がいらっしゃる地上は完全に別の次元に位置し、地上は大地となる円の外に在り、地集界は円の内に住んでおり、中央に浮くエネルギー球体により太陽の役割を果たしております。
それでは街の方に御案内致します

此方が私の元管轄であり、現在最も発展された場所で御座います
建物等は皆様の街で良く見掛けるビルと差して変わりは御座いませんが強度は凡そコンクリートの２０倍程度となっております

「０００１お帰りなさいませ」
「只今戻りました４７号。イマ様はどちらにいらっしゃいますか？」
「イマ様でしたら中央区１７番にて磔になっております」
「それでは今後も継続して下さい。逃走なさらない様警備の増員も御忘れなく」
「畏まりました。０００１はこれよりどちらに？」
「イマ様に御報告と開発局に依頼していた物を頂きに」
「作用ですか。それでは直ぐにイマ様の元に射出致します。宜しいですか？」
「どうぞ」

我々精巧人間に搭載されております秘核炉、空間操作には様々な用途が在り、空間固定意外に、膨張、圧縮、分解等も可能としております

「射出致します。方位Ｇ２４５、１７番。どうぞ」目視可能な程空間を歪ませ、幾層にも重ね合わせる事により、軽量物であれば秒速８００ｍまで可能となる射出法です
我々精巧人間だからこそ問題は御座いませんが普通の方には御勧め致しません。肉塊に成られても構わないのでしたらどうぞ御活用下さい。清掃部隊も万全です

「以上で御報告を終了致します。何か質問等は御座いますか？」
「ある。何で俺が磔にされてんだ、ん？」
「それは私達精巧人間の総意で御座います」
「そんなに憎いか！何もしてないぞたぶん！」

そういえば9号から気になる報告が有りましたね。何やら過激派に不穏な動きが有ると。早急に対象するべきてしょうか
「あー無視か？０００１無視はいけないと思うぞ、ん？なんか悲しいぞうん」
「イマ様」
「ん？」
「簡潔に申し上げます」
「うん」
「9号より『過激派の不穏な動き』について進展が御座いました」
「いやちょっと待て。俺そんなの全然知らないんだけど。ん？」
「イマ様だからです」
「お前アイツの所行ってものスゲー毒舌色に染められたな！ん！」
「私の主はイマ様より作間様に移行しつつ御座います。移行致しました」

「メイド盗られた！」
大変五月蝿いと判断致します。御静かに御願い致します
「ずみばせん。圧縮じないでください」
「ノイン様風に申し上げます。イマ様お口ちゃっくです」
「うわぁぁ！もえるなぁぁぁぁ！んん！」

それでは戯れ言はこれまどに致したいと思います。イマ様は本当に仁徳の無い御方です
「それではイマ様。なんなりと御命令を」
「排除しろ。ん？」

「申し訳御座いません。０００１の手を煩わせる事になってしまいまして」
「構いません３５号。貴女方には少々分が悪いのですから」

「みづけダぞ！イマぁァ！いマズぐコロシテやる！ころじてヤル！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」

「９号現状報告を」
「過激派によるオークのクーデターで御座います。彼等は高電磁体を保有しており我々秘核炉、及び重火器類等使用不能であります」
「じっでル。おばエらギガい。これアれバおまえラゴビ！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」

「ごろせぇ！」
「ごろせぇ！」

現状確認
成体オーク・４５２体
武装・高電磁体、アックス、ランス、短剣
状況・圧倒的有利と判断致します

「あ～０００１、アックスとかランスとか短剣言ってるけど鍬と木製槍と鉈だぞ。ん？」
「イマ様。どうなさいますか？御命令を」
「無視かよ。ん？まあ全員叩き潰せ」
「仰せのままに」

オークの皆様。貴方方わ大きな勘違いをなされております

「確かに１号から７２号までの秘核炉では高電磁体に耐える事は不可能でしょう」
と、申されても既に生存者は御座いませんね
１号から７２号までの秘核炉は私の秘核炉を基礎にイマ様が造られました。つまり私の秘核炉はオリジナルで御座います
「よーし。清掃部隊出動。あの肉塊片付けろー」
『畏まりました』

「いや相変わらず見事だ０００１。助かった」

「御褒め頂き光栄です」
「本当に何者なんだろうな。ｏｒｉｇｉｎ　ｗａｉｔｉｎｇ　ｍａｉｄ」
「それは私にも記録されておりません」
私は何時、何処で、誰に造られたか記録されておりません
故に私は　ｏｒｉｇｉｎ　ｗａｉｔｉｎｇ　ｍａｉｄ
故に私は原初の侍女

「それでは私は失礼します。御夕飯の支度が御座いますので」
「お～っす。小僧によろしくなー。まな板イビり程々にしとけー」
イマ様も程々に。いくら精巧人間として、侍女としと御仕えしているとはいえ余り目に余る行為でありますと
「私が直に圧縮しても宜しいんですか？」
「あれ？なんだ？こう・・・・体全体が・・・・ぐゅぇ」

大丈夫です。イマ様でしたら臓器損傷の一ヶ所や二ヶ所。物の数では御座いませんね

「ごぱぁぁ！ぜってー肝臓ヤバイことになってる」
「イマ様、御質問が有るのですが宜しいですか？」
「な、なんだ？ん？」
「こすぷれと御奉仕ぷれいとは何でしょうか？」
「こぞぉぉぉぉぉぉぉ！しにさらせぇぇやぁぁぁぁぁごぷぁっ！！どーゆー事だ０００１って居ねぇーし！居ねーぶふぁぁっ！し、しかも清掃部隊も居ねーし。やべ・・・・意識が」

「只今戻りました」
「おう。つかなんだそのゴツい銃は」
「Ｍ１４ＦＩＢＥＲ、Ｈ＆ａｍｐ；ＫＰＳＧ－１で御座います。後日ＲＰＧも郵送されます」
「ここは武器庫ではない。それと撃つなら野外にしろ。無駄に金と労力を消費させるな」
作間様に怒られてしまいました。反省です
「まあいい、喧しいアホが居ない事だしのんびりできる」
「左様で御座いますか。昨日作間様は大変御機嫌の様でしたが何か御座いましたか？」
「なぁに。旧友が此方に来るらしくてな。中学の知り合いさ」
「左様ですか。それでは明日より歓迎の準備を始めたいと思います」
「やめれ。アイツ調子乗るとノインの５倍はウザいから」
「早速ＲＰＧの試射が可能と判断致します。宜しいですか？」
「却下だバカタレ」
作間様に怒られてしまいました。要反省です

十三話！ーいちごうさんのいちにち（後書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃー

次は此方のコーナーです

『突撃御宅の晩御飯』

今回は此方の御宅に御邪魔したいと思います

ピンポーン

「はいは～い。どちら様ですか～？」

「今晩は。ＮＮＮの『突撃御宅の晩御飯』です」

「ひぇぇ！テレビですかぁ！先生全国ネットですよぉぉ！」

「それでは失礼致します。本日の夕食のメニューは何でしょうか？」

「えへぇぇ。生徒の皆がお弁当のオカズ一個ずつ分けてくれたんでそのまま晩御飯になっちゃいましたよ～」

「左様ですか。此方の玉子焼きは私が御作り致した物ですね」

「作間くんのお弁当は絶品ですよ～。またお休みの日に突撃ＧＯ～」

ありがとうございました

それでは御別れの御時間です。明日も良い一日を

この番組は、ト●シバと、疲れ、悩み、テンションに良く効くノイン酸を多く含んだ新商品『ＡＨＯＶＩＴＡＮ－Ｎ』の提供で御贈り

致しました

十四話！ーー作間典時のおともだち（前書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃ～

又々お久なノインちゃんです

今日ご紹介するのはこちら！（スポットライトオン）

象に踏まれても壊れない筆箱！！これ本当に堅いんだよね～。えいっ

ディレクター、ねぇディレクターさん

「なんだノイン」

これ象が踏んでも壊れないんだよね？

「そう書いてるぞ」

私乗ったら何か嫌な音がしたの。ねぇなんで？

「本編始まるぞ」

ねぇなんで？

十四話！ー作間典時のおともだち

「作間典時です。よろしくお願いします」
それが最初の挨拶だった

初めての町
初めての学校
初めての教室
初めてのクラスメート

今は名前も顔も思い出せない元担任が書いた下手糞な字を背に軽く頭を下げる
クラスメートは確か３０前後だろうか。男子数名以外は別段気にする事は無かった
「それじゃあ作間はそこの席に行きなさい」
運良く窓際の最後尾を指示され、鞄片手に席に向かう。その時中列の男の目は笑っていた。転校生をイジると宣言している様に見えて滑稽としか思えなかった
男の席を横切る瞬間横から伸びる足。普通ならつまづき転んでただろう。転校初日に笑いの種にされてただろうな

だから引っ掻けた足を思いっきり蹴り上げてやった。男は見事に席から引き摺り降ろされ無様に床に倒れた
「すまない。大丈夫か」
見下すように差し出した俺の手を男は乱暴に振り払い席に戻る。周

りで起きる忍び笑いに男は狂暴に俺を睨んでくる
だから何だ？
喋ったつもりは無いが顔に出ていたんだろう。男は犬歯を剥き出しにしながら睨んでいた

「おぅ転校生、ちょっと付き合えよ」
昼休み始まってすぐ数人の男に囲まれ体育館裏に連れて行かれた。
こうも分かりやす過ぎると笑いたくなってしまった

「テメェ初日から舐めた真似しやがって殺されてえのか？あぁ！！」
無様に転んでた男は下から睨み上げてくる
「出来もしない戯れ言しか言えないのか三下。たかが中坊の分際で思い上がるなよ」
「なっ！ぶっ殺すぞクソがぁ！テメェこそデケェつらしてんじゃねぇよ！マジで殺すぞ！」
「はっ。同じ台詞しか吐けないのか。仲間がいなけりゃまともに喧嘩も出来ない負け犬風情かこんな近くで喚くな。お前等を相手している程暇じゃないんだ。早く視界から消えろ」
「クソガァ！ぶっ殺してやる！」
力任せに振り上げられた拳が迫る。この程度で殺すなんて口にしているのか。滑稽でしか無いな

どう返そうか

そう考えた瞬間男の横顔には危険な角度からの飛び蹴りが決まっていた。
男の首が９０。以上曲がり直ぐに視界から失せる
周りの男は呆けて何が起きたかまるで理解できていない。溜め息を吐いて軽く顎をノックしてやった。弱すぎだお前等

「で、どちら様で？」
「けけっ。楽しそうな事してたみたいだからな。不味かったかい？」
「いや。寧ろさっさと終わって助かった」
「きひひ。そかそか。なら続きと行こうぜ？」
金髪のショートヘアにスパッツ付きのやたら丈の短い制服。常に笑ったその表情にはワルガキならでわの悪が根付いている

「悪いな。俺も多忙で相手をしてる暇が無い」
「たぼう？なら暇があったら続き出来んのか？」
「・・・・あればな」
「そかそか。きひひ。なら暇になったら連絡くれよ。じゃな」
そいつはふらふら楽しそうに揺れながら飼育小屋の中に入っていった

それから1ヶ月たった頃だろうか。見知らぬ男が声を掛けてきた
「すみません。作間典時さんでしょうか？」
「・・・そうだが」
「少しお時間頂けますか？少し聞きたいことがあって」
「なら放課後でどうだ」
「ありがとうございます。それでは失礼します」

礼儀正しい男は教室を後にした。金髪にあの顔立ち。何処かの不審者Ａを連想させた

「それで、何の用だ」
「実は姉についてなんです。柊琥珀をご存知ですよね。不審者Ａみたいな人です」
「不審者Ａならそこの飼育小屋で兎と戯れているぞ」
「・・・・・・姉さん。お願いだから本能で動くの止めてよ」
「むあ？とーやか。おぅおぅ作間暇か？暇か？」
「暇ではない。お前の弟さんに呼ばれている」
「そかそかー。とーや。今日は煮魚な。煮魚。あとこのウサギいけるか？いけるか？」
兎は小首を傾げ不審者を見上げている。逃げろ
「煮魚はいいけど兎は駄目だよ。それからいい加減こっちに来て」
「そかそか。ウサギ、じゃな。明日な」
柊琥珀ととーやと呼ばれた男。姉弟か
「改めて初めまして。柊冬夜です。それから姉の柊琥珀です」
「作間、よろしくよろしく。暇か？暇か？」
「・・・・冬夜」
「すいません。姉はこの際無視してください」
「むしか？むしか？ふーんだふーんだ」

無視しておくか
「それで俺に聞きたい事があると言ってたが」
「はい。先に確認しておきたいんですが杉浦さんをご存知ですよね」
「・・・・・用件はなんだ。師匠を知ってるなら少なくとも一般人ではないだろ」
冬夜は内面を見せない笑顔で封筒を手渡してきた

それが俺と二人の最初の出会いだった

で、だ・・・・・
かれこれ一時間近く待ってるんだが・・・・・・
どうやら仕置きが必要か。半年振りの再会だが盛大にヤルか
取り敢えずポピュラーな鉄バットか・・・・いや、1号さんに頼む
という選択肢もありか・・・・

「きひひ。きししし」
「すみません作間さん！遅れました！」
「久しぶり久しぶり作間。暇か？暇か？」
「姉さん謝ろうよ！なんで成長しないのさ」
「ぼいんだぞぼいん」
「脳の方だよ！何処で育ち方が間違ったんだろ」
「のう？のうがマズイか？とーや大変だな。今日は煮魚な。煮魚」
「いい加減煮魚やめてよ・・・てか謝ってよ！」
「よーしテメェーら覚悟しろ。安心しろ手加減してやる」
「いぃ！」
「きひ？」
取り敢えず拳骨な

場所変わって喫茶店

「これより罪人二名の言い訳を聞く」
「姉さんのせいです」
「とーやが悪い」
「両名極刑」
『ヒド！』
騒ぐな罪人。他の客に迷惑だろうが
「作間さん。姉が新しい町だからってやたら色んな場所に寄り道するから遅れたんですよ！」
「とーやが無理矢理引っ張るからスムーズに動けなかった。むじつむじつ」
「ならそれを食え。そしたら許してやる」
「・・・・作間さん。なんですこのバケツに入れたパフェ」
山のように盛り付けられたフルーツと生クリーム。天辺にそびえ立つ花火はオレンジ色に火花を散らしている
「この店目玉の『チョモランマ』だ。食った奴は二人だけだ」
その片割れは無論我が家の居候Ａだ
「さくまぁ・・・・・・さくまぁ・・・・」
いつの間にか隣に移動して涙目になりながら袖を掴み必死に何かを訴えている。
「何だ。早く食べろ」
計量スプーン小にこんもり添えられたミニパフェ
しっかりミニフルーツやミニ花火まで添えてある優れ物だ
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
「ったくさっさと謝ればいいんだよ。取っ替えていいぞ」
「きひひ♪」
琥珀は居候Ａを連想させる程の速さでパフェを消していく。お代は勿論お前持ちだ

「それで、なんでこっち来たんだ。お前等隣町の私立校だろ」
「ええ。実はあっちの高校で色々ありまして」
「むにぃむにぃ。あいつら弱々だから。ムグムグムグムグ」
カップを置き溜め息を吐く。つまり全ての原因はコイツか
「察してくれますか。流石に入学一週間で幡高の番を潰しましたからね。高校から警察の書類まで一掃する僕の身にもなって欲しいですよ」
冬夜は一口パフェを平らげると紙切れを取り出した。うちの高校の判が押されている
「来週から正式に作間さんと同じ高校に通うことになりました。チームの再結成ですね」
「やめろやめろ。うちの高校でそんな荒事なんてねーさ。寧ろソイツが事件の塊だ」
「作間作間、お代わりいいか？いいか？」
「代金はお前が払え」
「ケチケチ！」
だまらっしゃい。お前はアイツと同じ位喰い漁るんだよ。それから然り気無く人様の財布を狙うんじゃねぇ
「作間作間作間、家行こうよ行こうよ」
「誰の家にだ誰の」
「ゆー」
人を指差すな。本気でシバかれたいのか？つか家に1号さん居るんだよな
バケツを綺麗に片付けた琥珀は突然外に視線を向け邪悪に笑う
「んぁ。臭う臭う。喧嘩の臭いするな。けけけ。いいよないいよな？」
相変わらず荒事に関しては鼻が効くな
「まぁいいだろ。久しぶりに動くか」
「それじゃ僕は一帯の監視カメラ潰して置きますよ。後で請求しま

すからお先にどうぞ」
「きひひひひ。久しぶりだな久しぶりだな」
「まあな。つっても半年も行かねーだろ」

いつの世も弱者から金を奪う連中。馬鹿ばっかだな。ったく隣の馬鹿を抑える身にもなりやがれ。細い路地の奥でぐったりする男とそれを囲む男が5人
「なんだテメェーら？邪魔だから失せろや」
族上がりかどこぞの組の人間かね。喧嘩馴れしているようだがさして問題は無い。問題は隣だ
「いいねぇ喧嘩。好きだよアタシは。楽しませてよ少しくらい」
スイッチ入ったか琥珀。後は見てるだけか
「くくくくく。楽しいなぁ殴り合いはぁ。少しは満たしてくれよ」
「琥珀。3分だ」
「りょーかい♪」
言うが早く壁を蹴り、昔見せた跳び蹴りで一人。顎でも砕けたな
勢いそのまま回し蹴りで二人。肋骨御愁傷様
漸く反応した三人目が通称ヤクザキックで応戦するもあっさり避けられ急所蹴り。逝ったなありゃ

残りの二人は我先にと逃げ出していた。だが無駄なんだよな
「逃げちゃいやだねぇ」
二人の頭を鷲掴みしてそのまま地面とご対面
あ～あ。複雑骨折
「んあぁたまんないねぇ。でも全然足りないねぇ。作間ぁ。殺ろう

よ」
「時間切れだ。さっさと行くぞ。居候に連絡して煮魚を用意してある」
「んぁぁ！きひひひ。行こうぜ行こうぜ」
いつものワルガキに戻った琥珀を連れ足早に路地を出た

「御帰りなさいませ作間様。御友学の御二人もようこそいらっしゃいました」
「ただいま」
「・・・・・・・え？」
「・・・ぽかーん」
いつまで廊下に居るつもりだ。帰るなら帰れ
「え？えぇ？作間さんそんな趣味なんですか！」
拳骨×2
「さくまぁ！裏切り者裏切り者！」
よく分からんから拳骨
「御初に御目に掛かります。私作間様の御厚意により居候として働いております精巧人形1号と申します。以後御見知り置きを」
「作間さん！良い歳してどんなプレイしてるんですか！」
情け容赦無く冬夜の頭を鷲掴み。砕かれたいようだな
「おおおぉぉ！すいませんすいませんすいません！！」
「ったく変な勘違いしやがって。つっても説明が面倒なんだよな」
取り敢えず居間に通して簡略して説明。無論ノインの事も話している。暴飲暴食脳無しバカタレ精霊として
「みせれみせれアホ精霊。ちんちくりんだろ」

「ノインなら天に昇っている」
「な～む～な～む～」
「姉さん短絡過ぎだよ。実家に帰ってるだけだよ。それにしても異界ってまるでファンタジーですね」
しかし現に空飛ぶアホと現代科学では不可能な機械が動いているんだ。信じざるえまい
1号さんに頼んでいた煮魚単品を琥珀に渡し残りは普通に夕御飯。こら、人様の飯に箸を伸ばすな
「作間が修羅になった！修羅だ修羅！」
アホとの攻防がいつしか俺を修羅に変えていたらしい。だが許さん
「とーや！助けて助けて！作間恐い！」
しかし冬夜は一切無視して己の前にある御新香を一心不乱に食べ続けていた。4人前はいったな
「琥珀様。此方では作間様が法王で御座います。諦める事も大事かと思われます」
「ロボは作間の手先か！とーやとーや助けて！」
冬夜はイソイソと食器を片付けに台所に消えた

さて、覚悟はいいな琥珀

ところ変わって天界

「それじゃまたねママ」
「いってらっしゃいノインちゃん。余り迷惑掛けちゃ駄目よ」
「我が娘よ！今度会うときは更に逞しくなってくるがよい！胸の成長は期待しないぞ！」
「ママ！パパヤッチャってよ！情け容赦無く」

ゲートを飛び越えるノインの耳には父親の悲鳴が木霊していた
さて、漸く帰宅したノインは早速作間ベットに侵入を開始した。規則的に上下する布団にゆっくり近づきまずは布団の匂いをかぐ
「ああぁ。久し振りの典時の匂いだ」
後はもう本能に任せて布団に滑り込んだ。目の前にある体に何時もの様に抱き付き顔を背中に押し付ける
「てーんーじー」
「むぁ？」
ポヨンポヨン
ノインの手には抱えきれないナニかが当たった

「・・・・なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「むぁむぁ？」
「何奴コヤツ！私の典時はドコへ行ったの！」
「典時？作間か作間か。さくまぁーお休み」
「むきぃぃ！私のユートピアからはなれろぉ！」
「うっさいうっさいちんちくりん」
「てんじぃぃぃ！ボインがイジメルぅぅぅ！」

居間にて

「作間様。ＲＰＧの試射宜しいでしょうか」
「屋外なら許可したが今は許さん」
「畏まりました。それでは空間凍結により防音処置を施します」
「そうしてくれ。明日は大変だ。容赦無く模擬弾を射て」
「仰せのままに」

十四話！ーー作間典時のおともだち（後書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃ～

典時、ねぇ典時、てんじぃぃぃ！
「うっさい黙れ」
1号さあぁぁぁぁぁん！何か言ってよお願い
「象は雄で６ｔ前後まで成長なさいますのでノイン様は―――」
言わないで！お願いだから堪忍して！

「何した1号さん」
「少々悪戯をしてみました。侍女とも有ろう物が。要反省です」
「たまにはいいだろ」

十五話！――おこしやす天界！（前書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃー

御早う御座います。寝起きどっきりリポーターを勤めさせて頂きます1号です
今回御邪魔致しましたのは佐々木先生の御宅です
「・・・ひもじいですよーお腹すきましたよー」
作間様より御弁当を御預かりしております
季節外れのサンタクロースと佐々木先生驚喜するとの事でした
観察してみましょう。それでは一度スタジオに御返し致します

十五話！――おこしやす天界！

れっつごーれっつごー天界へ～～
おじいちゃんおばあちゃん真っ先に～
片道きっぷのお求めは～
薬局もしくは死神へ～

相変わらずすっごいテーマソングだな～
あ、シェイシェイ。貴方の永遠のマドンナノインちゃんで～す
泣きじゃくる典時に短い別れを告げてやって来ました昇天の門
もっとましな名前つければいいのにって思うけど昔の偉い人がつく
たから仕方ないよね

そんで私は天界直通列車の中でランチタイム！
私食は細い方だからね

あれ？なんか返事が返ってこないな？私食は細い方だからね？
・・・・・・・あそうそうさっきの放送あるでしょ。あれ待ち時
間に流れるイメージソングなんだって
６番まであって徐々にエスカレートするんだよ。確か５番で

れっつごーれっつごー天界へ～～
しつぎょうりすとらかいこしょぶん
気付けば貴方はふじのじゅかい

はやくおいでよ天界へ

よく私たち地上界の人に恨まれないよね

「あのー。すこし宜しいですか？」
お子さま連れのお母さんが声を掛けてきました
「もしかしてトゥアン・ダヌのお嬢様ですか？」
「そーだよ。その名もノインちゃんで～す！」
「ママ。この人がバカひめさま？」
「アルちゃん！なんて失礼な事言うの！」
うわぁ・・・・私チビッコにやけに人気あるけどバカ姫って言われてるんだ・・・でも泣かないっ

「すみません家のアルが。本当にすみません！」
「気にしなくていいですよ！わたし結構バカですから！」
「そうなんですか」
「うわあぁん。あっさり信じちゃったよぉぉ！」
帰るのこわいよぉぉ

さあ帰ってきたじぇマイハウス！懐かしきかな懐かしきかな
私の家って割と豪邸なのです。パパがこの天界で一番偉いからね。
でもパパよりママの方が家庭内権力上だし・・・・あれ？天界一

ってママ？
まいっか。さ、マイハウス突撃にゃぁ！
「たっだいまぁぁ！」
［侵入者を確認。侵入者を確認。直ちに敷地内より退きなさい。退かない場合、武力行使による排除を始めます］
「我が家なのにセキュリティーされた！」
「侵入者がいたぞ！」
「目標ノイン様確認！全員構え！」
「私だって知ってて撃つ気満々！私帰る家すら無いの！」
『お帰りなさいませノインお嬢様！（ぱんぱんぱんぱんぱん）』
「出迎え早々撃ってきたぁぁぁぁぁぁ！」
突風でお返しじぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
ちゅどーんばこーんどこーんばびゅーん
「私に勝とうなんて一万光年早いのだ！」
「やっぱりノイン様だ」
「あのバカっぷりはノイン様で間違いないな」
「相変わらずバカですねお嬢様は」
「うわあぁぁぁん。てーんーじーカムバック！」
あぁ木霊して返ってくる私の声が虚しいよぉ
「あらお帰りノインちゃん。乗り遅れないでよく来れたわね」
「ママ！私はいつまでも子供じゃないんだよ！」
「子供は必ずそう言い返すのよねぇ」
うがぁぁ！イラッと来るけどじぇったい勝てないからなぁぁ。んあぁぁぁぁストレスにゃぁぁ！
「それより早くお風呂に入りなさい。パパもうすぐ帰ってくるから」
久しぶりだな～パパに会うの。っていうか地上界に行く原因作ったのパパなんだけどね
取り敢えずお風呂に直行。パパッと脱いでダイビング！セクシーショットは無しだからね。全て典時のモノなんだから！

こっちの私服を着てぽけーっとしてまーす。おーなーかーすーいーたー
「ママー。パパまだ？」
「あらあら。もう少しで来るわよ。そろそろ温めましょ」
ママは台所に行ったし久し振りにママの手料理だなぁ。ママの料理って典時ぐらい美味しいんだよ

ちょっと味が偏ってるんだけとねぇー
「あら手が滑った」
目の前を横切る切れ味抜群の包丁。壁にめり込む程強く投げちゃってママったらお茶目さん♪
「ほら、パパ帰って来たわよ」
「ウン。ワタシイッテクルよ。マッテテパパ」
脱兎の如くダッシュ！ダッシュ！Bダッシュ！
命が在るってスバラシイよね？だよね？

というわけでパパご登場！ひっさしぶりだなぁー
「おぉ。そこに見えるは我が娘！久し振りだな」
「パパただいまあ～」
「お帰り我が娘。成長していないな」
「だって前から2年経ってないもん。まだまだ先だよ」
「ペチャパイだな」
「ゴーテューヘル！」
メッタメタにしてやる！典時以外のセクハラはめつ！めつ！めつ！
「はっはっはっ！強くなったな娘よ」
埃一つ着かないって相変わらず親なのに化け物みたいに強いよね

「旦那様。ノイン様。奥様がお待ちしておりますので御早めに」
ハヤクシナイトトンデクル・・・・トガッタノイヤイヤ

ひっさしぶりにママの手料理食べたな～。ん～ビバお袋のあじ！
「まふー」
おぅ！ちゃっぴぃいたんだ。モフモフサフサ
「まふーまふー」
何言ったるかさっぱりわかんねー
「まふまふふ～」
わかんねーよー。ママしか分かんないんだよね。ってかコレって何なんだろ。結構前から居るけど未だにどんな生物か分かんないよ
「娘よ。少しいいか」
「ん？なにパパ」
ちゃっぴぃはバウンドしながらママの方に行っちゃったし取り敢えずパパの隣にポスン
「地上界での生活はどうだ？今は作間という青年の家に居るようだが」
「んー結構楽しくしてるよ。典時はもうカッコいいし料理上手だし私にゾッコンラブだし最高だね」
「うむ。中々エンジョイしてるな。イマに話しは通したから問題ないな」
「ってかパパのせいで1号さんに蜂の巣にされかけたんだからね！」
「生きてるじゃないか」
「典時のお陰だよ！」
「何を言うか。そのお陰で更に作間青年との距離が縮まっただろ！」
「はっ！流石パパ！全て計算されつくされてたんだ！」
「無論だ！」
やっぱ上に立つ人は色々考えてるんだね

「水凝界と炎帝界にも話しは通したからこれからも地上界で修行に励むがよい！」
「よっしゃぁぁぁぁ！」
ってか修行ってなにするんだろ？嫁入り修行？

んあ・・・・あさだぁぁ
「ふぁぁぁ・・・・」
んにゃぁぁぁとのびで背骨がパキポキ
か・い・か・ん♪

「ノインお嬢様。バカしてないでお早くお着替え下さい」
「私ふと思うんだけどこの扱いってこれからもずっと直んないのかな」
「何を今更」
世知辛いよ。世界は世知辛いよ。ああ、典時の背中が懐かしい
「ノインお嬢様。お早くお着替え下さい。旦那様がお待ちですよ」
「・・・・へぃ？何かあったっけ今日？」
「・・・・・」
「その『本当出来の悪いお子様だ。昨日の事も思い出せ無いのか』みたいな冷めた目で見ないで」
「本日は総務派遣科にてノインお嬢様の地上界派遣の正式な手続き

を行う事になっております」
はて？昨日パパそんなの言ってたっけ？
昨日は調子乗ったパパがいつもよりお酒飲んでママに竜巻旋風脚やられてそのままだった気が
「娘！。起きたか？」
「パパ？起きてるよー」
ほら、右のほっぺに痣あるもん。やっぱあのまま寝たんだよ
「すまん娘。昨日言い忘れたが今日は手続きに出掛ける。この事でこっちに帰って来てもらったんだ」
「パパしっかりしてよ。ほいじゃパパっと着替えるかー」
パパっと脱いで新しいのをはきはきーっと
「ってか娘の着替え堂々と見るってどうなの？」
「胸が足らんな！」
「モンゴリアンチョップチョップチョップ！！」
この世で私にセクハラしていいのは典時オンリー！パパであろうとめつ！めつ！めつ！
「ぐはっ！やるな娘！一段と技に磨きが掛かったな！！」
「パパ！天に帰る時が来たのよ！北東百裂拳！」
「どこの馬の骨とも分からん奴にわが国を踏ませぬ！ぬーん大南掌拳！」
「パパの娘だぬーん！」
拳と拳がぶつかり合う！ほとばしるショック！弾けるビート！
「パパー、ノインちゃーん。いい加減にしなさーい。ママ怒るわよー」
駆け抜ける戦慄！
部屋から飛び出せアイキャンフライ！
「娘よ手続きに行くぞ！出来ればママにお土産買って帰りたい！」
「激しく賛成！」
そのまま直行だぜ！

そいえば天界について何も説明してなかったね？ノイン先生が教えてあげましょう

天界なんて言ってるけど地上界とたいして変わりないんだ。雲の上にあるわけじゃないし白いローブみたいなの着てないよ。そう思ってた人はドラク★やり過ぎだね
車だってあるし電車もあるよ。まあおっきな違いは私やパパみたいに空を飛んで移動する人がいるってことかな？まあ飛べる人って案外少ないんだよ。つまり私はエリート！頭が高い！控えおろー
「あ！バカ姫さまだ！」
「本当だ！バカ姫さま飛んでる！やっほ～」
控えおろ！控えおろー！
「はっはっは、娘よ、皆に慕われてるじゃないか！」
「これを見て慕われてるって言う！？バカ姫って言われてるんだよ！」
「娘、１＋１は？」
「２」
「バカ者だな娘よ！１＋１は２にも３にもなるのだぞ！」
「典時にそれいったら本気で哀れんだ目で見られたもん！」
「それは青年が常識を説いたからだ！正論のみの答えなどバカなのだよ。分かりやすく言えば娘＋青年はＬＯＶＥにも激ＬＯＶＥにも超激ＬＯＶＥにもなると言うことだ！」
「！！！流石パパ！やっぱりパパは偉大だね！」
「はっはっは！精進するがいい！」
私のパパは偉大だ！

はいで自由気ままに空のお散歩しながら派遣科ってのがある建物まで来ました。でっけー
「娘、この用紙に名前と印を。私は所長に話をしてくるから終わったらロビーでまってなさい」
「アイアイサー」
さらさらさら～と名前を書いて印をぽん。あ、そういえば天界とか1号さんの所とかで印は違うんだ。まりょく？って感じの力を判子に込めるからぎぞうぼうし？になるんだって
「受付のおねーさん。はいコレ」
「はい、少々お待ちください。・・・・・・・はい、『トゥアン・ダヌ・ノイン』様。確かに受理されました。地上界での派遣期間は『作間典時とラブラブランデブーになって一緒の墓に入るまで』で宜しいですね？」
「イエス！」
「御悔やみ申し上げます」
「何故に！？」
「精神科は此方を右に進みますと札が出ております。お急ぎ下さい」
「ほんっとこの扱い変わんないよね。みんなどっかで密約交わしてんじゃないの！」
「ご冗談を」
「むきぃぃぃ！上から目線がメッさムカつく！」
もうムシムシ！パパ帰ってくるまで本でも読んでよ。それにしても典時なにしてるかなー。1号さんとラブラブなんてしてたからマーダーライセンス取得してやる
「あ、姫さまだ」
もうこの子可愛すぎ。なんて純粋なんでしょ

「姫さま。地上界って楽しいですか？」
「んー、私は楽しいよ。かっこいい彼氏は出来たし漫画も映画も沢山あるよ」
「いいなー。私も行きたいな。映画ってどんなのありました？」
えーっとなんだっけアレ。崖の・・・魚の・・・ポニョン？
「ポニョンだっけ？歌が確か『ポーニョポーニョニョンカサゴの子？』だっけ」
「カサゴが主役なんだ！見てみたいなぁ」
私も見たこと無いけど場所は絶対港の岸壁の側で緑の海だよ
「サリアちゃん、こんな所にいたの」
「ママ！姫さまとお話ししてたの。地上界ってとっても面白いね」
「あらよかったわね。ノインお嬢様。娘がお手数掛けました」
「いえいえ！私も楽しかったです」
サリアちゃん親子はにこやかに手を振りながら去っていった。世界は捨てたもんじゃない！
「待たせたな娘よ。それではママにお土産を買って帰るとしよう。今夜出発だろ」
「うん。これ乗り過ごすと三日は無理だってママ言ってた」
「うむ。運悪く整備点検と重なってしまってな」
帰りにパパとママ御用達のお店でママが好きなお菓子かって私も典時にお土産。１号さんは・・・オイル？

「ただいまあ～。」
「今帰ったよ」
疲れたー。調子乗りすぎて買っちゃったぁー
「ようやく帰ってきたわねパパにノインちゃん。ちょうどお料理出

来たところよ」
「何はともかくママ朝はごめんなさい」
「ママさん朝は申し訳ない」
偉いお方になんか献上するみたいに高々と出します。スイーツいっぱいです
「あらあら二人して・・・許してあげましょう」
あれ？何か最近私って本当にダメな立場になってない？この立場ってパパの血じゃないのかな
「さ、今夜はノインちゃんの大好きなの沢山作ったから頂きましょ。お代わり自由よ」
「いよっしゃぁぁぁぁぁ！ママ超大好き！」
「あらあら。テンちゃんとどっちが好き？」
「・・・・・」
ごめんなさい。もうホント勘弁してください。ママの目マジなんですけど
「冗談よノインちゃん。もうそんな隅に行ってガタガタ震えないの」
ブルブル。私は悪いスライムじゃないよー

あーママの手料理これから当分食べれないなー
「ママー。ママお手製レシピ典時に書いてー。きくさげから貰った典時プロマイドあげるから」
「もちオッケー」
やっぱここは典時とママのコラボメニューいってみよー
「娘よ。ママをたぶらかすのは勘弁してくれ」
「なら今まで以上にママを愛すべし！」
「よく言った娘よ！」
やっぱ私たち親子だね

とうとう帰る時間だねー。典時にも1号さんにもお土産買ったし後は典時臭を吸収して寝ないとお肌に悪いんだよね
「それじゃまたねママ」
「いってらっしゃいノインちゃん。余り迷惑掛けちゃ駄目よ」
「我が娘よ！今度会うときは更に逞しくなってくるがよい！胸の成長は期待しないぞ！」
「ママ！パパヤッチャってよ！情け容赦無く」
後でパパの絶叫聞こえてるけどセクハラには体罰あるのみ！
パパグッパイ！

特別に典時の部屋に直通ー。取り敢えずふかーく深呼吸。身体中にテンジスキーが充満！元気百倍ノイーンちゃん！！
規則的に上下する布団にゆっくり近づきまずは布団の匂いをかぐ
「あぁぁ。久し振りの典時の匂いだ」
後はもう本能に任せて布団に突入！。目の前にある体に何時もの様に抱き付き顔を背中に押し付ける
「てーんーじー」
「むぁ？」
ポヨンポヨン
あれ？何この抱えきれない柔らかいの

「・・・・なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「むぁむぁ？」
「何奴コヤツ！私の典時はドコへ行ったの！」
「典時？作間か作間か。さくまぁーお休み」
「むきぃぃ！私のユートピアからはなれろぉ！」
「うっさいうっさいちんちくりん」

「てんじぃぃぃ！ボインがいじめるぅぅぅ！」

てんじぃぃぃ！カムバーック早急に！

十五話！――おこしやす天界！（後書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃー

「ふあぁ。おはようですよーひもじいですよー」
私はステルス状態ですので佐々木先生には認識出来ません
「うーひもじいですー。何処からともなくお弁当ふってきませんかねーってお弁当ですよ！サンタさんのプレゼントですかー！！」
・・・少々哀れですね
「ちゅー太郎！ご飯ありますよー！」
ちゅー
ちゅー太郎様もいらした様です
「ふわぁぁぁぁ！豪華ですよ！ちゅー太郎！一ヶ月振りのお肉ですよー」
ちゅー！
「はむはむ！この味は作間君の味！泣いちゃいそうですよー」
ちゅー

次回の寝起きどっきりは貴方かもしれません。それではまた御会い致しましょう

十六話！――ボインとメイドは私の敵よ！（前書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃー

ヤホホホホ！ノインちゃん降臨だぜゃ！
［こうりん］変換したら［香林坊１０９］ってあったぞ！なんじゃこりゃ！
［さざ］だけなら［サザビー］出たぜ！
知ってる？ブライトって書き方違うと虫害と輝くって意味あるんだよ！
因みに典時だと天神橋筋六丁目だって、何処だよ！

ノイン様、大変見苦しく思いますので速急に御休みください

十六話！――ボインとメイドは私の敵よ！

・・・・重苦しい雰囲気が辺りを包み、その場の者を呑み込もうと渦巻いている
疑心・嫉妬・恐怖が渦巻くこの空間で、彼等は何を見い出し、何を掴み取るのか・・・

次回、プリティーガールノインちゃんα
『戦慄・マモーの罠』
それでも私達は貴方を愛しています

「何だそのテロップは」
「暇だったから」

「作間作間、ちんちくりんうっさいなぁ」
「姉さん。あえて否定はしないけどはしたないからベッドから降りて」
「作間様、朝食の用意が整いました」
「典時！今すぐボインつまみ出してよ！」
「きひひ。作間作間、煮魚あるよな？」
「姉さん！下着見えてるから早く隠してよ！」
「・・・作間様？」
「・・・殺れ」
ベゴシャと快音と共に三バカが床で潰れている。身近なノインの頭を踏みつける
「黙れ。メシ抜くぞ」
「て、典時。勘弁して。てか何故にお踏みになられたの？」
「近くにあったからだ。１号さんを見習って少しは働け」

「ぜ、善処します」
漸く朝飯か

「それで。お前等うちの高校に転校するのはいいが何処に住む気だ？」
「実はこのマンションにしようかと思ってます。設備もセキュリティーもしっかりしてますしね」
「そうか。まぁお前等の自由だが貧乏神がたまに現れるから気を付けろ」
「えっと・・・・ちなみにどんな方ですか？」
「金欠教師だ」
「分かりました。取り敢えず鍵はかけておきます」
それはそうと・・・

俺等の後で1号さんの真似をしながら働くふりをする二大馬鹿。貴様等に飯は無いと思え
「作間様。少し宜しいでしょうか？」
「ああ。ノイン」
「よしきたぁぁ！」
台所から助走をつけ無駄なドリフトを決めながらテーブルの下にスライディングするアホ
「婚・活・万・歳！」
無駄な雄叫びと共に居間にある家具が浮き上がる
「せっ、先輩！なんですかこれ！」
「掃除だ。落ちるなよ」
下から1号さんをよじ登り俺に飛び付こうとするノインを払い落として新聞に目を通す
「作間作間！飛んでるぞ！今飛んでるぞ！」

「姉さん！いい加減ズボン履いてよ！何で昼間近でそんな格好なのさ！」

柊姉弟を無視してコーヒーを口にする。おいノイン。何故琥珀に対抗心燃やしてんだ。脱ぐな鬱になる。風呂でも掃除してろ

「てんじぃぃ！なんでそんなに冷たかぁ！」

「お前が常識を学べばいいだけの話だ」

下では1号さんが掃除機を掛けつつ雑巾で棚を拭いている。さらに壁にちらほら見える弾痕も何処からともなく取り出す樹脂のような液で修復している。1号さんは本当に有能だな

「先輩が褒めてる・・・・・絶賛してる！」

五月蝿いぞ冬夜。姉共々叩き出すぞ

「作間作間！ちんちくりん泣きながら外行ったぞ。家出か？」

「放っておけ。腹が減れば帰ってくる」

そうこうしてる内に掃除も終わり徐々に家具の高度も下がり元の位置に戻る。飲み終えてるカップに新たにコーヒーを注ぎそのまま定位置の俺の左後ろで待機する1号さん。やはり有能だな

なんだ柊姉弟。何か言いたそうな目だが

無言で首を振る姉弟を一瞥して読み終えた新聞を1号さんに渡し、カップに手を伸ばそうとした時、玄関先から不快な奇声が聞こえた

『さーくまくーん。先生貧困極まりないですよー』

「・・・冬夜。あの声が金欠教師だ」

1号さんは玄関に視線を向けると勝手にロックをした

ガチャガチャガチャ

『あれぇ？作間君お休みですかぁ？でもコーヒーの匂いがしますよー』

「アレが金欠教師の成せる技だ」

「どんな嗅覚してるんですかその先生」

『こうなったら行きますよぉあたぁたぁたぁたぁたぁたぁたぁ！』

ぴぴぴぴぴぴぴぴんぽん

速攻で玄関を開け放ち問答無用で金欠教師の頭を掴む
「金欠低脳教師。頭蓋骨陥没と即刻帰宅どっちがいい」
「毒舌レベル上がったと思ったら殺傷予告されちゃいましたよ！」
「来る度に呼び鈴連射する輩に情けを掛ける気など起きんぞ」
「ひえぇぇ！ごめんなさぃですよぉ！でもこのまま帰ったら先生飢えてしまいますよぉ！」
「てんじぃぃ！お腹ペコペコにゃぁぁ！」

もう五月蝿い奴が帰ってきたか。こいつらに飯を出せば冷蔵庫の中身が無くなる。只ですら部屋には琥珀も要るってのに
「作間様。こんな時の為に地集界より食材を郵送して頂いております」
「本当に優秀だな1号さん。後で新しい調理器具とか買ってやるよ」
「感謝の言葉も御座いません。これより一層誠心誠意込め作間様に御使い致します」
深々頭を下げる1号さんの頭に手を乗せ暴れるアホと金欠低脳教師を部屋に放り投げ部屋へと戻ることにした

数日後。俺のクラスに転校生として柊姉弟がやって来た。男女共に異様にテンション上げ直ぐに打ち解けた二人を眺めつつ、いつもの様に弁当片手に屋上に行く俺
あの二人が来たって事は近々師匠からまた手紙が届くか
若干鬱になりながら俺は昼寝を始めた

十六話！――ボインとメイドは私の敵よ！（後書き）

ちゃらっちゃっちゃっちゃー

先程は大変御見苦しい放送が御座いました。代わって謝罪申し上げます

ノイン様は極度の興奮状態にあり、錯乱状態に陥っております。何時もと大差御座いませんので温かく見下しておいで下さいませ

それでは皆様良い一日を

お詫び

えー毎度こんな更新遅い癖に駄文並べやがってコンチキショォォォォォォォォォォォと言われてそうでビクビクしてるウドの大木です

あ、もし更新したかな？とか思ってアクセスして下さった読者様もーしわけない！
だから刺さないで！

えー私ウドの大木はなんだかんだいって三作同時執筆しているわけで、え？知らない？えマジで！

あ、今はそこじゃない
というわけで三作同時執筆なんて無謀極まりないことやってたせいか４ヶ月更新してないなんて事が多々御座いました
いたっ！痛い、物を投げないで！
あ、まただっせんした
えー察しの良い方はニュータイプ並みに感じたかもしれませんが当面この作品は凍結します
私の処女作？になります一歩先から闇が完結するまでの間、誠に勝手ながら執筆を控えさせて頂きます

注意といいますか、一歩先から闇はシリアスだけだと5話で終わってしまいますがコメディーを盛り込むと１００話越えるやもしれないネタ具合です

一年で足りるか分かりませんがそれなりに長期の凍結となります。

本当に申し訳御座いません
一歩先から闇を満足出来る仕上がりにするため御理解と御協力を宜しくお願い申し上げます
もしかしたら一歩先から闇にノインとか典時とか遊思とか心とか見え隠れするかもしれませんが笑ってするーして下さい

それでは皆様、またこの作品でお会い出来るよう全力を尽くしていきますのでどうか忘れないでぇぇぇぇぇ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5677b/

いつも・いつでも・どこまでも〜〜っっ！

2010年10月9日20時04分発行